東南アジア研究　24巻1号　1986年6月

資料・研究ノート

小コミュニティの社会位相空間論

――マレーシア潮州人漁村にみられるリズム・テンポ・メロディー――

川　崎　有　三*

A Small Community as a Sociotopological Space

――Rhythm, Tempo and Melody of a Teochiu Fishing Village, Malaysia――

Yuzo Kawasaki*

Malaysian society is a typical plural society of several ethnic groups, of which the Chinese constitute the second largest. The society is an aggregation of ethnically homogeneous communities. Chinese communities in rural area are of two types: new villages and nonnew villages. The new villages were organized under governmental control in the 1950s and have urban characteristics. The nonnew villages which predate them were formed around Chinese religious buildings (*miao*) and primary schools.

The Teochiu fishing village where I lived for about one year and five months from October 1980 is of the nonnew type. In this village community can be found sociotopological spaces consisting of activities and relationships of villagers determined by situations in particular physical spaces in the village. I will demonstrate that there are two sorts of changes in these sociotopological spaces. One involves the fundamental rhythms which are observed cyclically in the year, the month and the day. The other is made up of noncyclical changes, namely, rites of passage, abnormal situations and intervention by outsiders in the village.

With respect to fundamental rhythms, three sociotopological subspaces are important. These are the spaces of fishing activities formed by adult men, the Chinese religious space formed by women, and the Chinese primary school, where children learn about the outside world. Of the rites of passage, the funeral rite is most important. The village as a whole transforms into an abnormal state during this rite. Abnormal situations such as shortage of water and fire tend to make the village a corporate body. When outsiders, for example, Teochiu outsiders, non-Teochiu Chinese, Malays and Indians come to the village, the village reacts as if it has biological immunity. Outsiders are considered as antigens, and villagers who have wide networks outside the village and rich experiences with such outsiders act as antibodies. By these villagers' efforts, the influences of outsiders in the village are minimized.

* 東京大学東洋文化研究所; Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113, Japan

は じ め に

筆者は1980年10月12日から1982年２月７日まで，途中数日から10日前後の不在期間[1]を除いて，マレーシア，セランゴール（Selangor）州北西部の潮州人漁村Ｓ村[2]に継続して住みこんだ。このおよそ１年５カ月の間，筆者は参与観察者として村の社会生活に参加した。そこで筆者が感じたものは，このＳ村をとり巻く目にみえない社会空間の境界と，村の社会空間に時間的位相変化をもたらす村に固有のリズムやテンポ，そしてメロディーである。

社会の構成要素は個々人である。しかし，社会空間は決して個々人のみからなるものではない。むしろ社会空間とは，個々人によって意味づけられた個々の識別可能な物理空間と個々人とが織りなす，人と物理空間の結合体である。この社会空間の要素である個々人と個々の物理空間との関係は多様であり，決して一意的ではない。この要素間の関係を決定づけるものこそは，個別の位相を与える状況変数である。この状況変数は時間であることも多いが，また村の社会空間に対して外在する個々人であったり，あるいは予見不可能な自然現象や村人たちの行為そのものであることもある。同一の要素から複数の社会位相空間が形成される。社会空間（以下，特に断らないかぎり，社会位相空間と同義の語として使う）にとって本質的なことは，認識されるその実体が観察者に依存するという，その性格である。本稿で叙述・分析される村の社会位相空間とは，村の部外者であり村人たちとは著しく異なる文化的背景をもつ筆者による観察に基づく実体にほかならない。

近代国家マレーシアにおいては当然ながら，国家全土において共有される時の流れが，標準時（日本よりも１時間遅れ）によって定められ，それは発達したマス・メディアにより全国津々浦々にまで伝播される。[3] 国家規模での暦の標準になっているのはグレゴリオ太陽暦であり，一見したところ近代的で画一的な時のリズムが打たれているようにみえる。しかしながら，マレーシア国土のある部分的な社会空間に注目すると，その小地域には固有の時の流れや社会生活のリズムが現れる。村落コミュニティに現れるこの時間的変化は，年中行事や通過儀礼においてと同様，経済活動や社会生活の中にもある。本稿は，村空間のもっている固有のリズム・テンポ・メロディーが，村の社会位相空間の位相変化として，どのように現れているかを記述し，分析するものである。

I　マレーシア社会における村空間の位置づけ

マレーシア社会の複合性は，複数民族の共存と地理的および社会・経済的なさまざまなレベルにおける不均質な民族分布にある。[4] マレーシア半島西海岸の農村部に位置するＳ村は，マレーシア社会全体の中で次のような部分空間におかれている。マレーシア社会はマレー人，中国人，インド人，原住民などの

---

1) 不在期間は1980. 10/29-10/30（10/29に村を出て10/30に村に帰ってきたことを表わす），12/9-12/10，1981. 1/21-1/25，3/30-4/2，6/24-6/27，7/3-7/5，8/19-8/30，12/14-12/16，1982. 1/16-1/17，1/23-1/24，1/26-1/28，以上31泊42日間である。村人たちとともに村外での村人の葬式への参列，村人の漁船に乗って出漁して村を離れた場合は，この中に含まれない。

2) Ｓ村についての概略は川崎［1984］参照。

3) 従来，半島部とサバ・サラワク地域では標準時間が１時間ほど違っていたが，1982年１月１日以降サバ・サラワク時間に統一され，シンガポールも同時にこれにならった。

4) 川崎［1985c］参照。

民族集団により構成される。半島部においては原住民の占める割合はわずかであり，基本的に他の3民族が主な構成員となっている。半島部東海岸北部のトレンガヌ(Trenganu)，クランタン (Kelantan) 両州ではマレー人の比率が圧倒的に多く，西海岸では中国人，インド人の比率が比較的に高い。半島部西海岸地域においては海峡植民地以外にもクアラルンプール (Kuala Lumpur)，イポー (Ipoh)，セレンバン (Seremban) などの都市が発達した。これらは皆スズ鉱山の隆盛によって発達した都市であるが，こうした都市部には流入した中国人やインド人が商業者化して民族ごとに独特の街区をつくりあげていった。一方，農村部ではマレー人が稲作を主とする農村村落を形成しており，マレー的な伝統を保持しているとともに，広大なエステートが主に西欧資本によってつくられ，そこには多くのインド人労働者が働き，コミュニティを形成していた。また，海岸部では比較的古くから中国人たちが漁業を営み続けていた。つまり半島部西海岸の農村部は基本的にマレー人の農村地帯ではあるが，多くの中国人，インド人たちの住む都市や町を控え，マレー人コミュニティの周辺に中国人，インド人コミュニティが点在するというモザイク状の社会空間をつくり出している。

i) 新村の社会空間

中国人の民族的な凝集力はさまざまな形で現れる。中国人という民族集団の下位集団は方言集団である。この方言集団ごとの分布は各州，各縣において偏りが大きく，さまざまな方言集団が雑居している都市や町においては，その地域の共通の言語として北京語，広東語あるいは福建語などが使われている。[5] 方言集団を基礎とした同郷組織である「会館」や同姓の者からなるクラン・アソシエーションは，都市部において重要な意味をもつ。しかし，農村部においては，これらの組織よりもむしろ地縁集団としてのコミュニティの方がより大きな社会的意味をもつことが多い。特に，それが排他的でかつ同質的である場合には極めて大きな意味をもつ。都市近郊や農村部にみられるこうした中国人コミュニティは，ふたつに大別することができる。ひとつは「新村」であり，他のひとつは「新村」以外の村落コミュニティである。

新村は1950年代当時の治安状況の悪化に対応して政策的に再編成されたコミュニティであり，マレーシア全土で数百という単位でつくられ，その分布は東西マレーシアの極めて広い地域にまたがっている。居住者は必ずしも中国人ばかりではなかったが，大部分を中国人が占めていた。しかし，設立当初から今日に至るまでの間には多くの変化を受けている。[6] このような新村の中には社会秩序の恢復とともに住民が流出して自然消滅したものもあったが，今日まで続いているものが多い。

新村の社会空間は極めて特殊である。その理由は成立過程にある。新村は内（中心・核）から外へと発展したものではなく，外から内に無理やりに押しこめられたものだからである。この外から内に向かう強い力は，例えば新村をとり囲むような有刺鉄線の存在により物理的に表現されて，いまなお一部に残されている。また新村の入口に掲げられることのある大きな門は，ここが明らかにほかとは違う，特殊な空間であることを明示してい

5) 例えば，クアラルンプールやイポーでは広東語，ペナンやジョホール・バル (Johor Baharu) では福建語が，共通語として広く使われている。

6) 1980年前後の新村の州別人口分布 (Ministry of Housing and Village Development の内部資料により作成した。正確な資料作成年は不明）と1954年の州別の新村の数 [Nyce 1973: L. Table 6] は，次ページの表の通りである。

る。新村の家屋は密集している。それはあたかも兵舎のようにかぎられた空間に最大限の人員を詰めこむかのように整然と秩序正しく，重苦しくなるような几帳面さで家が並べられる。都市近郊であると農村地域であるとにかかわらず，新村の家並みは村という名前の響きとは裏腹に，都市の雑然とした街区を想起させる。外からの力は人々をしてまた特異な性格を生じさせた。それは中国人という枠組の中での同質性の高さと，方言集団の混在である。本来，民族としての凝集力は方言集団単位で強力に働き，職業集団，各種のアソシエーションばかりでなくコミュニティ形成にあっても重要な役割を果たしてきた。[7] しかし新村においては，異なる方言集団をも外からの圧力により，ひとつの場所に封じこめてしまった。この方言集団における雑種性は新村の都市的な性格をより強める。さらに，新村形成後の人口の着実な増加は，村内に押しこめられた人口密度を確実に押しあげ，ますます都市街区的な色彩を強くする。新村内部にはこうした状況に対応して，わずかな隙間から都市的な機能が噴き出してきている。映画館，「飯店」(レストラン)，「旅店」(ホテル)，そして方言集団ごとの「会館」(アソシエーション) が凝集力の核として新たに形成される。

こうした新村とは対照的に，政府の政策的な影響をほとんど受けずに発展してきた村落コミュニティも存在する。こうした村落の人口は概ね1,000人前後で，中には200-300人程度のものもみられる。方言集団は比較的に同

7) 川崎 [1978] を参照。

注6) の表

人口規模＼州	ジョホール	ケダー	クランタン	マラッカ	ヌグリ・スンビラン	パハン	ペラ	ペナン	セランゴール	トレンガヌ	計 (%)
-500 人	7	4	5	6	11	7	27	1	2	2	72 (15.6)
501-1,000	23	13	9	6	12	9	28	1	4	1	106 (22.9)
1,001-2,000	20	10	6	7	8	18	26	1	7	0	103 (22.2)
2,001-3,000	20	4	1	0	5	5	22	3	9	0	69 (14.9)
3,001-5,000	15	2	1	1	4	4	20	2	10	0	59 (12.7)
5,001-10,000	5	2	0	0	1	3	13	0	6	0	30 (6.5)
10,001-	2	0	0	0	0	0	3	0	3	0	8 (1.7)
不　明	0	0	0	0	0	0	11	0	5	0	16 (3.5)
計	92	35	22	20	41	46	150	8	46	3	463(100.0)
1954年 計	94	44	18	17	39	77	129	8	49	4	479

注8) の表

民族＼地域	西海岸		内セランゴール州		東海岸		計	
マレー人	15,269	31.0%	1,027	13.1%	25,234	94.6%	40,503	53.3%
中国人	32,990	66.9	6,660	85.2	1,403	5.3	34,393	45.3
インド人	342	0.7	95	1.2	2	0.01	344	0.5
その他	702	1.4	35	0.4	23	0.1	725	1.0
計	49,303	100	7,817	100	26,662	100	75,965	100

表1　サバ・ブルナム縣の中国人漁村

村　　名	K	R	T	B	O	C	S	G	E
世帯数	約100	31	36	38	約60	約90	129	約300	約200
優勢な姓	紀	紀 (陳)	王	王	陳	謝 (蔡)	謝 (陳)	謝	謝 (王)
その他の主な姓	謝，陳 林，蔡 王，黄 朱，洪 呉	?	謝，黄 許，葉 余	?	謝，王 林，鄭 蔡，周	李，曽 王，紀 沈，陳 雷	黄，王 盧，蔡 鄭，潘 林，荘 胡	王，陳 黄，紀 蔡，林 盧	陳，蔡 紀，林 黄，鄭
出身地	?	澄海縣	?	?	澄海縣 外砂郷	澄海縣 外砂郷	澄海縣 外砂郷	澄海縣	?
雑貨店	5	1	1	3	3	6	6	約10	5
魚行	2	2	1	1	4	4	5	約10	約20
魚粉工場	1	2	0	1	0	0	0	5	4
主な廟	法師公 拿督公	拿督公	法師公 清安廟	法師公 拿督公	法師公 拿督公	法師公 将軍爺	拿督公 将軍爺 童子爺	法師公 拿督公 将軍爺	法師公 拿督公
父母会	1	0	?	?	1	3	2	4	1
政党支部	馬華*	—	?	?	馬華	馬華 民政**	馬華	馬華	馬華
歴史	100年	70	80	40	?	80	70-80	70-80	?
学校	有	無	有***	有***	有	有	有	有	有
墓地	無	無	無	?	有****	有	有	有****	無

*「馬華公会」(マレーシア中国人協会)，**「民政党」，*** TとBの共用，**** 墓地はあるが，すでに飽和している

質的で，自律性とともに強い排他性をもっている。こうした村落を特徴づけるものは中国伝統の廟と中国語小学校である。S村はまさにこうした村の典型にほかならない。

ii) 漁業・漁村空間の社会的意味

漁業はマレーシア経済の中でそれほど大きな位置を占めてはいないが，漁業活動の中で中国人が優位な地位をもつことは特筆すべきである。数の上ではマレー人漁民にやや劣るものの，[8] 近代化の進んだ中国人漁民たちのひとりあたり漁獲量は，マレー人漁民を凌いでいることが多い。特に，西海岸に点在する漁村の多くは中国人，中でも潮州人たちからなるものであり，このような漁村の存在も不均質な民族分布の一端を表わすものである。漁業活動における中国人の優位は単に漁獲水揚げ量などの量的なものにかぎらない。流通経路も潮州人を中心とする中国人たちが握っ

8) 1973年の西マレーシア東西海岸の漁民数（漁船による）は，前ページの表の通りである［岩切 1977：290-291，第2表］。

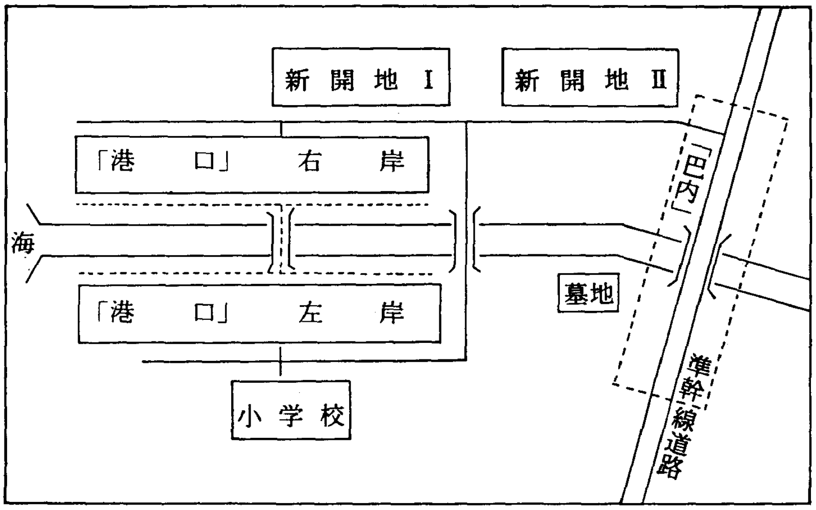

図1 村の構図

漁村がかなり大きな独立性をもっている。海岸線に沿って漁村同士を結ぶ道は，わずかに車が1台ようやく通れるほどのものがブッシュの間につくられているばかりで，幹線道路はより内陸部のマレー人集落の合間を縫って走っている。

漁村に特有なのは雑貨店，「魚行」(魚商)，廟，そして中国語小学校である。それぞれの村の大きな廟では1年に1度「潮州劇」が神にささげられる。また政党の支部をもつ村も多く，政党のパイプにより村外の中国人社会と密接に結びついている。また潮州会館やクラン・アソシエーションは村人たちを村外の潮州人社会に関係づけている。現在も使用可能な墓地を村内にもっている村は比較的に少なく，墓地をもたない村では隣州ペラ (Perak) 州の町トゥロ・アンソン (Telok Anson) 近くの「韓江義塚」(潮州人の会館が管理する墓地)に埋葬することが多い。これらの漁村では潮州人が数の上で圧倒しているばかりか，ひとつの姓が優位にたつことが多い。漁村間の世帯の移動は特に大きなふたつの漁村への移住を除いてはごくまれで，人的移動は女性の婚入・婚出にほとんどかぎられる。

ており，[9] 魚市場で飛びかう売買の言葉は主に潮州語なのである。

セランゴール州北西部に位置するサバ・ブルナム縣 (Sabak Bernam District) には，S村をはじめ九つの中国人漁村があり，それらは皆，主に潮州人たちからなっている（表1参照)。出身地も潮州地方の澄海縣という比較的狭い地域にかぎられることが多い。村の歴史は約70-80年であることが多く，この地域への中国人移民の流入は20世紀初頭であったことがうかがえる。漁村の規模は数十世帯から数百世帯までとやや幅があるが，その基本的な存在形態には類似点が多く，特有の漁村空間を形成している。漁村は多くの場合，小河川の両岸に杭上集落を形成し，内陸部（「巴内 (*palai*)」と呼ばれる）にはマレー人集落を控えている。漁村同士のつながりは，地理的に極めて近いTとB，それに一方が他方に社会・経済的に従属的であるKとRの例を除いて，あまり強くなく，それぞれの

II 村空間

i) 社会位相空間としての村落

S村は地理的な自然の境界により区切られる（図1参照)。「巴内」地区のようにマレー人家屋が混在しているところもあるが，「港口」や新開地では後背地としてのブッシュが「村落」のまとまりをより明確にしている。本章以下で対象とする村の社会位相空間と

9) 「水産物流通機構については……集出荷から卸売を経て小売りに至るまで華僑魚商の支配が強固であり，小数［ママ］のインド人系魚商は弱小である。産地および消費地の卸売業者とくに後者の多くは他分野の業務も持っていて資金力や華僑独自の相互信用力も強く，集出荷および分荷仲買商を掌握している」[岩切 1977: 305]。

は，こうした「村落」において村人たちが村の中のさまざまなレベルの物理空間の中で，そのおかれた状況によって規定される特有の行動様式，社会関係の全体をさして使う。当然，彼らの行動範囲は村を越えて，近くの町やあるいはクアラルンプールなどの都会にまで伸びうる。しかしながら，彼らの行動様式と活動密度は村内外では著しい違いがあり，村内での彼らの活動全体からつくり出されるものを，重層化し絶えず変動するが認識可能な特有のパターンをもった村の社会位相空間としてとり出すことが可能である。

S村においては社会空間を考えるうえで次の三つの軸が重要である。第1に，村を支える経済的基盤としての漁業活動，第2に，人々を村へと凝集させる伝統的な中心である世帯内の祭壇や廟にかかわるような宗教・儀礼生活，第3に，村人たちを村外の社会に結びつける近代的な中心としての学校である。この三つの軸は村人たちの三つのカテゴリーである男，女，子供たちによってそれぞれ担われる。つまり，漁業活動は男たちの仕事であり，宗教・儀礼生活は女たちによって主に担われ，学校に直接かかわるのは子供たちである。漁業活動が男たちによって担われることは，男女の社会空間を明確に隔てる。男たちの社会空間は何よりも経済活動の足場としての漁船そのものであり，男たちが最もその活力を発揮するのもこの漁船上においてである。若い男たちにとっては漁船は単に経済活動の場であるにとどまらず，家の前に碇泊させている漁船は，自分専用の部屋をもたないことの多い彼らにとっては，友と語らい，休息の時を得る場となることも少なくない。一方，女たちにとっては漁船に乗ることはほとんどタブーとさえいえる。清掃や補給のために船上にたつことはあっても，出漁することはまずできない。女たちにとって意味のある社会空間とは，家の台所，洗濯場であり，こうした女の領域によその世帯の男がたち入ることは，そこが商売の，あるいは仕事の場である時以外には，極めて異常なことである。女たちの近所づきあいはこうした台所や家の裏庭をつなぐ，小さな集団からなっており，世帯主である男たちとは違った種類の社会関係をもつことも少なくない。女たちは世帯内外においてもっぱら儀礼生活の実務に携わる。客間の祭壇や台所の神，家の前庭の小さな祠は，彼女たちの世話するところとなる。そして，彼女たちが世帯外において，安心してくつろげる場所は村内の廟なのである。ここでは，各世帯のベランダでと同様に行き合った人々の間に気楽な会話がかわされ，絶好の気晴らしの場となる。乳幼児の子供たちの活動範囲は世帯周辺にかぎられるが，彼らが幼稚園・小学校に入園・入学すると，子供世界としての学校空間を新たに獲得することになる。彼らは毎日，この世帯と学校を往復する。この日々繰り返される異空間の往復運動が，彼らの社会化に多民族社会の複雑さの陰影を与える。

村の社会空間の最も機能的な部分空間は，各世帯ごとにつくられる世帯空間である。この世帯空間が必ずしも家屋と一致しないのは，世帯単位を決める要素の多様性を考えると当然である。[10] 世帯空間を決めるひとつの要素は共食であるが，例えば共食というひとつの要素をもとにしても，さまざまなレベルの共食空間を村の部分空間として考えることができる。この村においては共食空間が世帯空間を越える場合は，友人同士のインフォーマルな場合を除いて，比較的に少ない。それは結婚式，葬式，「父母会」の成立記念日，老人の誕生祝い，それに学校に関連した行事にほとんどかぎられる。[11] そして，このよう

10) 川崎［1985b］参照。
11) 村人たちが，あるいは世帯主が皆一堂に会して共食することはない。しかし「童子爺」廟の生誕祭や清明節の時には，世帯ごとに同じ額ずつ

表2　1982年マレーシア連邦セランゴール州祝日一覧

1月1日	陽暦新年（グレゴリオ太陽暦新年）
1月8日	回教先知穆罕黙徳誕辰（モハメット生誕）
1月25日，26日	農暦新年（中国太陰太陽暦新年）
2月7日	大寶森節（ヒンドゥー教徒の祝日）
3月8日	雪蘭莪蘇丹誕辰（セランゴール州サルタン生誕）
5月1日	労働節（メーデー）
5月8日	衛塞節（ヒンドゥー暦新年）
6月2日	最高元首誕辰（国家元首生誕）
7月9日	可蘭經降世（コーラン経のための祝日）
7月22日，23日	開齋節（断食月明けの祭日）
8月31日	國慶節（独立記念日）
9月14日	屠妖節（ヒンドゥー教徒の祝日）
9月28日	哈芝節（メッカに巡礼したムスリムを祝福する日）
12月25日	聖誕節（クリスマス）
12月28日	回教先知穆罕黙徳誕辰（モハメット生誕）

な世帯外でフォーマルに共食空間が形成される時には，どの部分空間に構成要素として属するか，つまりどのテーブルで誰と一緒に「菜」（料理）を共有するかが問題となる。構成要素が多くなればなるほど，部分空間ごとの違いは明瞭となり，自分にふさわしくないテーブルについた者は食事の間じゅう気まずい思いをすることになる。

また，村の社会空間は地理的な村落に密接に結びついているが，決してそれにいつもとらわれるわけではない。事実，「通」の母親の葬儀が村外で行われた時には，村の社会空間の主要な部分空間が「通」の兄の家にもちこまれたのである。

ii）村空間のリズム・テンポ・メロディー

村内に形成されるさまざまな社会位相空間は決して，それぞれの部分空間ごとに固定されたものではない。むしろ，それぞれの部分空間ごとに独特の時間的変化をするのが常である。この村空間内のさまざまな社会空間にみられる時間的位相変化は，あたかも村人たちを個々の演奏者とするような一団の交響楽団にたとえられる。演奏は時にバラバラで，必ずしも全体がひとつのハーモニーを奏でるとはかぎらないが，個別の演奏には共通した様式がみられる。本節では，この村人たちの演奏をリズム・テンポ・メロディーという三つの側面から分析する。

＜リズム＞

多民族社会であるマレーシアには複数の時の流れのリズムが基本にある。近代国家としては西暦が，ムスリムたちにとってはイスラム暦が，中国人たちには「農暦」と呼ばれる伝統的な中国暦が，そしてヒンドゥー教徒にはヒンドゥー暦があり，こうした各種のリズムが重ね合わされてマレーシア独特の複雑なリズムを打ち出している。この多様さの一端は，例えばセランゴール州の祝日の一覧表（表2参照）をみればすぐに理解することができる。しかしながら村の中においては，わずかに学校がこのマレーシア独特の複雑なリズムを一部に反映させているにとどまり，村人たちの生活リズムに他民族や近代的なものが及ぼす影響は驚くほど少ない。「陽暦」（グレゴリオ太陽暦）新年やクリスマスのもつ意味はほとんどないに等しいし，断食月明けにあるムスリムたちの最大の休日 *Hari Raya Puasa* でさえ，ごく一部の村人たちに影響を与えるにすぎない。[12] ヒンドゥー教徒たちの

出し合って供物をそなえ，それをのちに等分に分けることによって共食をしているとみることもできる。

12）村人たちの中でこうしたマレー人の祝日に招かれるのは顔役たちであることが多い。彼らのマレー人のもてなしに対する評価はかなり低い。ひとつには食事のマナーに対する様式の違いで，手で食べること（客として招かれる村人たちにはスプーンが出されるにしても，同席のマレー人たちが）は彼らにはなじみにくいし，ま

祝日に至っては，道すがらにその一端をかいまみるという程度であって，積極的な影響は皆無といってよい。

村空間のリズムを形づくっているのは，何といっても村の生業を支える漁民たちである。彼らの出港/帰港，トロール漁/「黒昌魚」，豊漁/不漁によってつくり出される社会生活の振幅こそは，村の基本リズムを打つものである。彼らのリズムは潮汐，魚の回遊，天候・気象など，自然が醸し出すものであるといってよい。村の中のもうひとつの基本リズムは，学校という村人たちにとっては異空間の中で打たれる。それは機械じかけの時計のリズムであり，人工的な規則性と西欧が生み出した近代社会制度のもつ普遍性を想起させる。漁民たちの自然のリズムは中国人の伝統的な暦，農暦とうまく調和しており，村の中の伝統的な中心である廟への参拝，世帯の中心である祖先・神への「拝」のリズムと絶妙な共鳴をしている。学校の人工的なリズムもまた，さまざまな形で村人たちの生活の中にはいっている。時間ごとに区切られたテレビの番組表，時間内でしか事務を受けつけない役所など，村人もまた近代的な時間から切り離せない存在となっている。実際，時計はさまざまな形で村人たちの生活の中にはいっており，人々は時間感覚を少ない時は「何字分」(1字は5分間，恐らく時計の文字盤から来たものであろう)，多い時は「何時間」という形で表現する。

<テンポ>

村空間にはふたつのテンポが交互に繰り返される。それは，早く力強く脈打つ「熱鬧」(賑やかなようす)のテンポと，「閑散」(ひっそりかんとしているようす)のテンポの対比である。「熱鬧」の時には，村は熱気で包まれ，人々は興奮する。それは例えば「黒昌魚」の漁期，「蚶」の採取期，廟の生誕祭，農暦新年などにみられる。村には村外からも人々が集まり，村人たちの金回りはよくなり，商店が賑わい，夜遅くまで人がごった返す。逆に「閑散」の時は，シケが何日も続いたり，あるいは「海警」(漁業局のパトロール)が出て，漁に出られない時であり，人々は昼間から家の中に閉じこもり，店に人影はない。学校帰りの子供たちだけが大人の出てこない村の中で歓声をあげ，年寄りたちがいつもと変わらぬように三々五々集まって，とりとめもない話をはじめる。村は弛緩していて，そこには中心もみえなければ，外形も定かではない。人々の生活は世帯空間内に繰りこまれ，緩やかな時の流れが世帯を包む。男たちは手もちぶさたに，ごろりと横になって，怠惰をむさぼる。出漁しない漁民たちにとっては，特別な儀礼や催物がないかぎり1日のはじまりはなく，休息という名の動かない時計が彼らにはあるだけである。

<メロディー>

村人たちの日常生活は，その大部分が優雅な潮州語のメロディーで満たされる。たとえ村人たちの話す潮州語の中にマレーシア語，中国語の他の方言，英語などの異質のものが混ざっているとはいえ，[13] 彼らの言語の調子そのものを変えることはない。ここでも唯一

た食事の内容が「菜」中心の彼らとは異なり「ご飯物」中心で，味つけも彼らに比べれば単調である点，さらには飲物が瓶入りの清涼飲料水でなく，どぎつい色のついた甘い水であることや，タバコが振る舞われることが少ないことなどが，マレー人のもてなしに対する不満としてあげられる。最も大きな相違は経済力の格差であり，裕福なマレー人の豪華なもてなしに対しては当然批判は緩められる。

13) 例えば，元来英語から来たマレーシア語をそのまま使う「摩多 (*moto*, オートバイ)」，「徳士 (*texi*, タクシー)」，*pesion* (年金)，またマレーシア語を変形させた *mata* (*mata-mata*, 警官) など，さらには *suka* (好む)，*tapi* (しかし)，*tahan* (耐えられる)，*lagi* (それから) などの動詞，接続詞も多用され，若者の中にはマレーシア語起源であることに気がつかない者も多い。英語のbecause も中等教育を受けた者の間でよく使われる。

の例外は学校で，ここでは北京語の優越と，マレーシア語，英語との共存が顕著にみられる。村人にとって異質の空間であるというゆえんは，ここにもうかがえる。この学校が与える影響はかなり大きく，若い人々の間では村人同士でも北京語が話されることがある。それにはちょっと気どった，自分の教育水準を誇示するような一面がある。しかし，これとても顕著に現れるのは村外の者を交える場合であり，村の若い者だけで北京語を話し続けるのは「道化」的でさえある。

村の中でのメロディーは何も村人たちの会話にかぎらない。廟の生誕祭や葬儀で演じられる潮州劇もまた，その独特の楽器と歌唱が醸し出す立派な潮州メロディーである。残念ながら，現在の村人の中には楽器と歌でこのメロディーを活性化させることができる者はいない。村人たちはもっぱらカセット・テープでこの潮州メロディーを再生しているにすぎない。そして，ここにもまた北京語の強い影響がみられる。学校での北京語は嫌いでも，流行歌となるとまた話は別で，若者たちが口ずさむメロディーはむしろ日本の演歌に似た北京語の歌詞のものであることが多い。さらにまたディスコ風のわけの分からぬ英語のリズムが加わる。マレーシア語の哀調を帯びたメロディーは，むしろ民族的な反感から遠ざけられる。イスラムの宗教的な合唱隊の音楽は，最も聞きたくないものとして最下位に位置づけられる。日常生活においても最も下の社会階層としてみられることの多いインド人たちのメロディーが，テレビ映画の中に現れる時にはコミカルなものとして歓迎されるのは，興味深い。村人たちはそこに自分たちとは異質な躍動する生命のリズムを読みとるのかもしれない。

S村が漁民たちによって支えられていることは，ここでの潮州語のメロディーに大きな

表3　1 年 の 周 期 的 位 相 変 化

	漁業活動	宗教・儀礼生活	学校（1981年度）
1 月		一月初一　「農暦新年」	1月5日　新学年開始
		一月初五　「神回来」	2月19日　合同理事会
	トロール漁	二月初八　「拿督公生日」	教師節
		三月初一ごろ　「清明節」	
		三月十五　「将軍爺生日」	4月10日　1学期終了
			4月27日　2学期開始
5 月	「蚶苗」採取	四月二十八　「童子爺生日」	5月29日　運動会
	（約2週間）	五月十五　「端午節」	
		七月十五　「中元節」	8月1日　2学期終了
	トロール漁	八月十五　「中秋節」	8月17日　3学期開始
9 月		九月初九　「法師公生日」	9月8，9日　5年生統一試験
	「黒昌魚」漁	九月二十九　「義心社週年」	9月12日　高学年生徒見学旅行
	（1カ月-3カ月）		
			10月9日　児童節
			11月9日　合同理事会
			11月13日　1学年終了
12 月		十一月初九　「互助部週年」	
	トロール漁	十一月二十七ごろ　「冬至」	
		十二月二十四　「神上天」	
		十二月三十　「除夕」	

影響を与えている。漁民たちはほとんど皆，ディーゼル・エンジンを装備したトロール船に乗って漁に出る。海上での意思疎通は自ずと大声での会話となり，また男だけの激しい肉体労働の場では，自然に男たちだけの会話を醸し出す。村人たちの会話には当然それぞれの個性があるが，彼らの潮州語は早口で，しかも吃音者が多い。彼らは会話を楽しむという一面，強烈な自己主張が時には相手への激しい罵倒となり，それが日常化されると，一般的な言語伝達の様式の一部にさえ変容する。

III　村空間の周期的位相変化――基本リズム

S村の社会空間の周期的な位相変化は大きく1年，ひと月（ともに陽暦と農暦の2種がある。本稿では陽暦は算用数字，農暦は漢数字で表わす），[14] 1日という三つのサイクルに分けることができる。この地域では，1年を越えるような長いサイクルで宗教儀礼や行事または経済活動が行われることはほとんどない。この三つのサイクルの中では，1年という周期が最も大きな意味をもつ（表3参照)。

S村のおかれている自然環境は，村人たちにはっきりとした自然のリズムを感じさせない。村の中央を流れる川の水量に大きな季節的変化はなく，また村をとり囲むようにして茂るブッシュの林も年中緑をつけている。季節を告げる動植物は，わずかに時節の到来を告げるドリアン（durian）などの果物にかぎられる。赤道のほとんど真上，熱帯に位置するマレーシアでは四季の区別はなく，また半島西海岸においては東海岸でみられるようなはっきりとした雨期／乾期の区別はない。日の出，日の入の時刻でさえ，年間に十数分と変わらず，ただ潮の干満の変化と月の満ち欠けのみが，村人たちに1日を越えた時の流れのリズムを知らせるのである。

i）1年の位相変化

＜経済活動＞

（漁業）　漁業活動には3種のものがあり，ほぼ暦に従って行われる。基本にあるのは沿岸トロール漁であり，乗組員2，3人で日帰

14）筆者が村に滞在している間の陽暦と農暦の対応は，次の通り。

陽　　暦	農　　暦
1980年10月12日（日）	庚申九月初四
11月1日（土）	九月二十四
11月8日（土）	十月初一
12月1日（月）	十月二十四
12月7日（日）	十一月初一
1981年1月1日（木）	十一月二十六
1月6日（火）	十二月初一
2月1日（日）	十二月二十七
2月5日（木）	辛酉一月初一
3月1日（日）	一月二十五
3月6日（金）	二月初一
4月1日（水）	二月二十七
4月5日（日）	三月初一
5月1日（金）	三月二十七
5月4日（月）	四月初一
6月1日（月）	四月二十九
6月2日（火）	五月初一
7月1日（水）	五月三十
7月2日（木）	六月初一
7月31日（金）	七月初一
8月1日（土）	七月初二
8月29日（土）	八月初一
9月1日（火）	八月初四
9月28日（月）	九月初一
10月1日（木）	九月初四
10月28日（水）	十月初一
11月1日（日）	十月初五
11月26日（木）	十一月初一
12月1日（火）	十一月初六
12月26日（土）	十二月初一
1982年1月1日（金）	十二月初七
1月25日（月）	壬戌一月初一
2月1日（月）	一月初八
2月7日（日）	一月十四

り（その日に帰るとはかぎらないが24時間以内に帰港）する。漁獲物は大部分がいく種類かのエビで，魚は少ない。５月の２週間だけは「蚶苗」（幼貝）の採取期で，この村の沿岸部にのみ繁殖する「蚶苗」を求めて，老若男女を問わず，小船（*sampan*）にのって海に出る。女・子供が海に出るのはほとんどこの時にかぎられる。また，ふだんは海に出ないような現役を引退した男たちも，この「蚶苗」とりには参加する。「蚶苗」は近くの町で州の漁業局により買いとられ，年によってその値段は一定しないものの，値の高い時には相当な額の臨時収入[15]となり，村人たちを潤す。この時には小学校の高学年のクラスには欠席が目だち，家族総がかりで漁に出るようすがみてとれる。この「蚶苗」をとるための金網を売る店も出てくる始末である。しかし，村を熱気で包むような「蚶苗」とりも，２週間という期間が漁業局により決められており，長引くことはない。また再びトロール漁の穏やかな毎日がしばらく続くと，今度は回遊魚である「黒昌魚」（*Bawal Hitam*，マナガツオ科に属する）の漁がはじまる。この漁のはじまりは，「蚶苗」とは違って，どこからともなく伝わってくる噂にある。この噂はどこそこの誰それが「黒昌魚」をとったということであり，９月から12月までの平年の漁期にはいく度もこうした噂が人々の口にのぼる。実際，こうした噂に基づいて「黒昌魚」漁に出るか出ないかは，この漁に出漁できるだけの大きさの船（30-40トン）と魚網と10人程度の人員調達能力をもっている，船主の決断にかかっている。積極的な者は噂の早い段階で村一番に漁に乗り出していくが，最も慎重な者は村人の多くが実際に「黒昌魚」を水揚げするのを確認してから，おずおずとこの漁へと乗り出していく。従って，漁民たちが一斉にトロール漁から「黒昌魚」漁に切り替わることはなく，最盛期に向けて徐々にトロール漁から「黒昌魚」漁へと漁業活動の重心が移っていく。「黒昌魚」漁の時にはトロール漁と違って，自分で船をもっていても，それが中型か大型でないかぎり自身が船主になることはなく，ほかの船主の網子となって働くわけで，ここにおいて漁民の再編成が起こる。このように多数の網子を乗せて出漁した場合は，例えば次のように水揚げが分配される。乗組員が10人の場合，総水揚げ高から経費（燃料，水，氷，食糧などにかかるもの）を差し引いた額を10＋３（３は船主のとり分）で割ったとり分をそれぞれの乗組員に，その３人分を船主（自身も乗組員になっている場合がほとんど）のとり分とする。もちろん中には一貫してトロール漁を続け，「黒昌魚」漁に参加しない者もいるが，最盛期にはごく少数にしかすぎない。「黒昌魚」漁はかなり沖合いに出て行われる。通常５-７日間程度海に出ていることが多い。従って，出港／帰港のリズムはトロール漁とは大きく異なり，この漁の期間中には男たちが出払ってしまい，女・子供と年寄りたちばかりのひっそりとした日々が続くこともまれではない。トロール漁とは違って「黒昌魚」漁では豊漁／不漁の差が大きく，また同じ時期に出漁しても漁船によって水揚げ高は大きく異なる。豊漁が続く時，村は漁船が帰るたびに「蚶苗」の時のような熱気に包まれるが，不漁で水揚げがほとんどないような時は暗く沈んでいる。漁は12月ごろまで続くことが多いが，これもまたそれぞれの船主たちの判断で決められ，漁民たちは徐々にまたトロール漁へと戻っていく。

かつては海に出て勝手放題に漁をしていた漁民たちも，いまは海産資源保護に乗り出している漁業局の厳しい監督のもとにある。漁民であること，漁船の所有者であること，さ

15) ひと桶 10M＄-22M＄，ひとりひと晩で７-８桶とることもある。

らには漁網の使用者であることについても免許が必要であり，毎年免許の更新が行われる。このやっかいな免許の更新には，魚商たちがそれこそ東奔西走して漁民たちの面倒をみなければならない。

（養豚・養鶏）　「港口」が漁業活動のための空間であるとすれば，新開地Ⅱは村の経済活動の第２の柱である養豚の空間である。水路の右岸には広い道路が開かれ，レンガづくりの家と豚舎が間隔をおいて並び，その裏手には排水用の水路が流れる。また，家屋の裏に小規模な豚小屋をつくっている家も多い。頭数100頭以上の大規模な経営をしているのは７世帯ほどで，数頭から数十頭飼っている世帯は37世帯ある。[16]　このような小規模な飼育では，たいてい世帯主の妻か娘たちが家事の片手間に豚の世話をしている。村内で豚の屠殺をするのは，「振」の祖母のほかにサバ・ブルナムの町から来ている者もいて，彼は新開地Ⅱに豚の処理場（丸焼きのできる大きな炉をそなえている）をもっている。しかし，多くの豚は村外の仲買人に売られる。豚の需要が多い農暦の初一や十五の前には，村の中を生きたままの豚を籠に入れて運搬するオートバイが往来する。豚の飼料は箱単位で村外の業者から買われ，飼料を運んでくる大型トラックは，そのケタはずれた重量のせいで，しばしば村の道路を台なしにし，時には自らつくった窪みにタイヤをとられて立往生することもある。新開地Ⅱ地区では豚の飼育のために大量の水が使われ，水道管を通して村外から送られてくる水の大半は新開地Ⅱで消費されてしまい，新開地Ⅰにはわずかに水が届くものの，「港口」に至ってはいくら蛇口をひねっても，１滴の水も出ない。この水の不均衡な使用状況は「港口」住民の常日ごろの不満であり，新開地の養豚をする住民たちとの間に対立した関係をつくり出している。

養豚の空間が地域的に世帯空間を越えて広がることが多いのに対して，養鶏の空間はそれぞれの世帯空間に付属した部分空間をなしている場合がほとんどである。鶏を飼うことは，この村ではごくあたり前のことと考えられている。ほとんどの世帯で鶏を飼っており，アヒルやガチョウを一緒に飼っている世帯も多い。その大部分は自家消費用であり，数百から数千羽の単位で飼育しているのは３世帯あるにすぎない。[17]　このような家では大きな鶏小屋がつくられ，生育を早めるためにランプあるいは電燈がつけられる。鶏の世話をするのは主に女の仕事である。これらの鶏は村内で売買されることもあるが，多くは村外からやってくる仲買人に売られる。

＜宗教・儀礼生活＞

宗教・儀礼生活において村人たちの生活の節目となる行事は２種類に分けられる。ひとつは，農暦新年にはじまり十二月三十日の「除夕」におわる，中国人ならばどこに住んでいても行うような種類の年中行事であり，もうひとつは，この村に特有であるか，あるいはこの村にある廟に特有な行事である。前者においては各世帯を中心にして行事が行われ，村の統合が現れることは少ない。一方，後者においては村ないし，村内のある特定の集団の統合が強く現れる場合が多い。この両

16)　概数で「傳」—100，「逢」—200，「龍」—100，「良」—100，「文」—150，「漢」—100，「発」—100頭である。豚の肥育期間は７－８カ月，母豚に子を産ませて肥育する者もいる。オス豚１頭の値段は外国産のもので1,000Ｍ＄という。飼料はもっぱら村外から大型トラックで箱単位で運搬されるキャッサバが使われる。

17)　鶏は自家消費用に飼っている世帯が91世帯，売買をしている世帯は７世帯，アヒルについては自家消費用90世帯，売買している世帯は２世帯のみ，ガチョウは24世帯全てが自家消費用に飼っている。大量に飼っているのは「富」の2,000羽，「良」の500羽，「源」の2,000羽である。

者はいずれも農暦の中に行事の日づけが明示されてあり，その刻まれるリズムは非常にはっきりしている。

（中国人の年中行事）　あと１カ月で新年というころから，村は何となくざわめいてくる。村にやってくる衣料品の屋台売りも頻繁になり，家の修繕や，家具の修理など，新しい年に向けての準備がさまざまな形で行われる。ちょうどこのころは子供たちも学校が長い学年末の休暇にはいる時であり，結婚式が頻繁に行われる。新年の間の休みにはまた旅行や，いろいろな楽しい計画が練られる。喫茶店の壁には旅行社の正月旅行の案内がはられ，人々は新年を心待ちにしながら，うきうきと毎日をすごす。日本の年賀状に似た「賀年片」は，日本と違って正月前に相手につかなければならない。従って，相手が返事を書くことも計算に入れると，どうしても新年の１カ月も前から「賀年片」の束を抱えた郵便配達夫が毎日村を訪れることになる。「賀年片」には「新年進歩」，「萬事如意」といった言葉が書かれ，色は赤や金などのあざやかなものが好まれる。「賀年片」を最も頻繁にやりとりするのは若い人，特に女性たちである。客間にこの「賀年片」をきれいに飾りつけている家もある。

日本の大晦日にあたる「除夕」は，家族がひとつのテーブルを囲んでごちそうを楽しむ時である。日ごろは勉学や仕事のために村外で暮らしている若い人，出稼ぎにいっていた父親たちも，必ずこの「除夕」の晩餐には村に帰ってくる。そして子供たちの一番の楽しみである「紅包」（お年玉）も，この時に父親からわたされるのである。「紅包」をもらうのは何も子供たちにかぎらない。すでに職をもっているような青年も，また漁民たちでも，それぞれ父親や「魚行」の「老板」（主人）から「紅包」をもらうのである。新年は賑やかに迎えられる。村の中央にかけられた橋には爆竹がしかけられ，午前０時の時計とともに派手に鳴らされる。各世帯では客間がきれいに飾りつけられ，お正月の「財神到」（お金を儲けさせてくれる神を呼びこむ）の賑やかな音楽がカセット・レコーダーから流される。村のあちこちに人がたまり，興奮が人々をわきたたせる。新年につきものなのは何といっても「舞獅」（日本の獅子舞いに似たライオン・ダンス）である。この村には「舞獅」を舞う者はいないが，近くのサバ・ブルナムの町からは村の有力者の家に舞いにくる。有力者の家の前庭で揃いの服を着た「舞獅」の一隊，３，40人が集まり，楽器に合わせて舞う。[18] そこの家族たちは軒先に「紅包」をつるして，これを「舞獅」に「食べさせ」，ご祝儀とする。[19]

村の中ではほかにこれといった行事はなく，村人たちは正月には「大食（*toa chia*)」（ごちそうを食べる）というばかりである。確かに，毎日の食事はいつもと比べて豪華になり，ふだんとは違う華やいだ雰囲気が漂う。近隣のマレー人が村の空家の前に店を出して *sateh*（マレー風焼鳥）を焼く。仕事のない男たちは昼間からさまざまな賭ごとに精を出し，女や子供たちは家庭の中でやはり小金を賭けたゲームを楽しむ。正月にはマレー人が村人たちの賭ごとに加わることもある。村人たちはこうしたマレー人を「お金のあるやつ」だという。テレビでは正月に因んだバラエティ・ショーが放映される。もっともマレー人やインド人の出演者たちが出る時には村人たちはうんざり顔だ。しかし，このごろでは，若者にかぎらず，世帯主たちも，少し余裕ができれば，クアラルンプールなどの都会に繰り出したり，あるいはマレーシア

18) この時に来たのはサバ・ブルナムの「馬華公会」の支部の一団で，「勤」と「潮」の家を訪れた。
19) この小さな村では子供が「舞獅」に似せた小さな布をかぶって近所を回り，結構な小金を稼いでいた。

国境に近いタイの町に遊びにいって,[20] もっと派手で賑やかな正月をすごすことが多い。また,この長い休みを利用して,村外にある妻方の実家を子供連れで訪れる者も少なくない。従って,バスやタクシーなどの交通機関は正月休みじゅう混雑することになる。近隣に住むマレー人の中にはこの機会を利用して,村の有力者の家を訪れ,ごちそうのおこぼれに与かろうとする者もいるが,村人がマレー人を正式に招待する例は,州政府の役人かあるいは「謝兄弟公司(会社)」の雇人たちにかぎられる。漁民たちが漁を休むのは「除夕」から正月初三ぐらいまでで,初四ごろからぼつぼつと漁に出る者が出はじめ,初五にはほとんど皆,漁を開始する。正月は仕事の区切りであり,この時を機に仕事をやめる者もあり,また新しい仕事をはじめる者もいる。

十二月二十四日は神が天にのぼる日であり,一月初五は神が帰ってくる日である。どちらの日にも村の廟には供物をもって参拝する人が多く,各廟が最も賑わう日のひとつとなる。

年に1度の墓参の機会である清明節には,ふだん人影のない村の共同墓地もたくさんの人で賑わう。それぞれ清明節の数日前から墓掃除をして,きれいになった墓に家族連れで参り,その供物を家にもち帰って,ごちそうとして食べる。墓地を村外の比較的に遠い場所にもつ家では,必ずしもこの清明節の時には墓参せず,家の中の供物だけで済ませて,他日墓参する者もいる。墓地は現在と過去とをつなぐ空間的接点である。村人たちの高い流動性は重層的な過去を広汎な現在の社会空間に結びつける。従って,年に1度の墓参である清明節には,墓地に村を飛び越えた異質な空間がそれぞれの祖先の墓を拠点として分立する。しかし,墓地の空間は祖廟のそれのような過去への強い求心力をもたない。墓は古くなるにつれて次第に忘れられ,また軟弱な土壌に埋めこまれ,過去は現在に呼び出されることなく持続的な過去として忘却されてしまう。墓地空間にあって未婚の者の墓が特異なのは,それが過去から現在へではなく,近い過去から遠い過去を(つまり子世代から親世代を)逆に照らし出すからである。

端午節には各世帯ごとに思い思いに工夫をこらした *bachan* (ちまき) がつくられる。もち米に肉,栗,そしてアンコを加えてつくったものを竹の皮でくるんだ食べ物である。その形,大きさ,そして材料にはそれぞれの家ごとの伝統があり,実に豊富な種類がある。ひとつの世帯で50-100個つくられるこの *bachan* は村の廟にそなえられ,それはもち帰られて皆に振る舞われる。

中元節の前は雑貨店が繁盛する。どの世帯でも,この時期に食料品を大量に買うからである。中元節の当日,ちょうど潮が引き切った時に,それぞれの家のベランダや前庭に,食物が川に向かって供せられる。1本1本の線香がそれぞれの食物にさされ,また「国泰民安」,「風調雨順」[21]のような願いごとを書いた赤い旗がたてられることもある。この中元節はまた「拝好兄弟」,「拝水鬼」とも呼ばれ,この農暦七月は「鬼」(子孫に祖先として祭られることのない死者の霊) が出てきて危ない月だともいわれる。この月に結婚する者はいない。

中秋節(「拝月亮」ともいわれる),この時

20) タイに行くということは女遊びをするという暗示を含んでおり,タイにばかり行くというやゆは女好きを意味する。実際,村の年配の男たちの中にはタイに行って遊んできた者が多い。こうしたマレーシアの外でのみやげ話は喫茶店での格好な話題となる。

21) そのほかに「盂蘭勝會」,「国境昇年」,「魚利豐收」,「満載而歸」,「漁翁得利」,「出進平安」,「海業興隆」,「生意興隆」,「合港平安」などがある。これらの旗は店で売られている。

にはさまざまな形をしたちょうちんが子供たちによってもたれる。「月餅」を食べ，そして，夜に月に向かって供物をささげる。しかし，今日ではこの供物をささげる家の数は少なくなってきており，小さな子供のいる家や，若い女性のいる家にかぎられている。

冬至には，「包」（肉まん，あんまんの類いの中華まんじゅう）と紅白のダンゴが廟と世帯の祭壇にそなえられ，自分の年だけ，このダンゴを食べるといわれている。

（村に特有の行事）　村にある「童子爺」廟と「法師公」廟の「生日」（生誕祭）には，潮州劇や人形劇が神のために奉じられる。特に「童子爺」廟のものは規模が大きく，村一番の祝日となる。村人たちは数カ月前から，この潮州劇がはじまるのを心待ちにして期待感を膨らませる。全ての世帯から同額の供物のための献金と各世帯の経済力に見合った潮州劇への献金が集められる。「童子爺」の生誕祭の時には，この祭りの期間だけ村内に日常的な社会空間とは異質な空間が，「童子爺」廟と「戯台」の間の物理空間に形成される（末尾の資料Ｉ参照）。漁民たちは漁に出ることはなく，魚商も開店休業の状態となる。日ごろ分散されがちな村の部分空間は，廟と潮州劇によって醸し出される空間へと凝縮する。村の中心は明瞭で，村人たちは自己のアイデンティティを再確認するとともに，村外の人々をこの空間においてもてなす。村は生き生きと輝き，再生する。

「法師公」は「童子爺」よりやや規模の小さな生誕祭を催す。しかしながら村人たちの祭りへの参加は部分的で限定的である。「童子爺」の場合と違って，この祭りに全く関与しない世帯も多い。この違いは村人たちのふたつの廟に対する認識の違いから由来する。「童子爺」はまさに村の廟であるがゆえに，その中心に向かって村空間は凝縮するが，10年前にひとりの村人によって開かれた村内よりもむしろ村外に多くの信者をもつ「法師公」は，単に村の中にある廟であるにとどまっており，「法師公」を中心とするような社会空間の凝縮は村というよりむしろ村を越えた信者空間の凝縮という形でみられるばかりである。

「童子爺」と同じく村の廟である「将軍爺」，「拿督公」においては生誕祭としての特別な行事は行われない。各世帯が輪番で毎日供物をささげる「将軍爺」の場合はその参拝の性格からして，焦点となるのは日ごとの参拝の中心の移動であり，「将軍爺」廟への村空間の凝縮は起こりえない。

この村には葬式のための互助組織である「父母会」として，「義心社」と「互助部」のふたつの組織がある。会員は年に１度集まり，供物を村内の廟にそなえ，その供物を共食する。この時に任期満了の役員を選出することもある。「父母会」は原則的には葬式の互助が目的であるが，その成員が成立時に固定されると，以後変わることがなく，会の消滅まで持続することにより深い結合力をもっている。会の成員であることは，成立の時点で，さまざまなレベルでの社会的特質（例えば経済力，年齢，来村してからの年数など）を共有しうる者たちで，しかも互いに敵対関係にはない者同士でなければならない。このような互助的な組織と小コミュニティの関係は多様である（表１参照）。「父母会」によってつくられる社会空間が小コミュニティの空間を越えることはなく，小コミュニティの空間にほぼ一致するか，またはそれを共有部分をもちながら非排他的に分割するかである。ひとつの小コミュニティに複数の「父母会」がある時には，「父母会」同士の間に潜在的/顕在的にある種の対立を生み出すことになる。

＜学校＞

学校は村内にあって村外であるような性質

をもっている。従って，その時の流れを刻むリズムも，村とは違った独自な，しかし州内のほかの学校と共有されるものとなる。

学校の1年間のスケジュールは第1学期14週間が1月のはじめにはじまり，2週間の休みをはさんで第2学期，同様の休みをおいて第3学期があり，11月半ばに1学年を終了し，7週間ほどの学年休みにはいる。学校の1年は何よりもまず生徒を迎え入れ，卒業生を送り出し，それぞれの学年の生徒を1学年進級させることにある。村の子供たちはこの1年間を6度繰り返すことにより，村の学校空間を通り抜ける。

学校の年中行事において，教師たちが村人と接点をもつことはほとんどない。村人たちで学校とかかわり合うのは合同理事会の理事たちにほとんどかぎられる。彼らは2，3カ月に1回開かれる理事会に参集するばかりか，主だった理事たちは学校のさまざまな行事に参加することもまれではない。

子供たちにとっては学校空間から解放される学期ごとの休暇，特に学年末の長い休暇は大きな意味をもっている。この休暇の間にはしばしば自分の両親の家を離れ，近い親族（例えば父親の兄弟や母の両親）の家に1カ月近くもひとりで寝泊まりして，同年輩のイトコたちと休暇をすごすことも多い。また，村外の学校に通う村の子供が同級生たちを連れて村にやってきて，町とは違う漁村の生活を味わわせることもしばしばある。こうした時の世帯でのもてなしは丁寧で，開放的でさえある。

ii) ひと月の位相変化

月のうちで村が最も賑わうのは農暦の初一と十五である。朝から村内の廟に参拝する女性や少女の姿がそこかしこにみえる。各世帯でも供物をささげるところがある。初一，十五は生活の節目であり，また村人が神や祖先とコミュニケーションをもつ時でもある。コミュニケーションのための供物は例えば果物，豚肉，鶏肉，アヒルの肉，スルメ，菓子などであり，香炉にさされる線香や明りをともされるろうそく，そして焼かれて神や祖先に送られる「紙銭」である。明りの乏しいこの村では月明りは大変貴重で，十五夜前後の晴れた明るい晩には村の中心部，見晴らしのよい「港口」の橋の上や，そのたもとの喫茶店，遊戯場が人で賑わう。しかし，こうした人出はほとんど男たちにかぎられ，女が家の外に出ることは近隣の雑貨店や人の集まりやすい家のベランダを除いては，ごくかぎられている。

＜町空間＞

S村には雑貨店が6軒あり，たいていの日常の用はそこで足りる。しかし，年寄りや小さな子供を除いて，どの村人でも月に数度は近くの町，スンガイ・ブサル（Sungai Besar）やサバ・ブルナム，そして時にはサキンチャン（Sekinchan）の町まで出かけていく用事がある。そして近くの町まで出かけるのに欠くことのできない乗物がオートバイなのである。[22] この村の世帯の過半数には1台から数台のオートバイがある。運転免許をもっている者の数は意外なほど少ないが，乗り回している者の数は台数に対応する程度に多い。[23] 自分の家にオートバイをもたない者は親族か友人・知人を頼むことが多い。町にはマレー人のオートバイ・タクシー（オートバイの背に客を乗せて運ぶ）が客を待っていて，容易にみつけることができるが，村の中

22) この村には128台のオートバイがあり，67世帯が所有している。その内訳は1台―43世帯，2台―15世帯，3台以上―9世帯である。

23) 男の子にとってオートバイに乗れることは一人前になることの条件でもある。彼らにとってオートバイは単なる交通手段ではなく，手軽な遊び道具であり，いかに上手に乗りこなすかは自慢のたねである。また若い女性の中にも乗る者が少なくない。

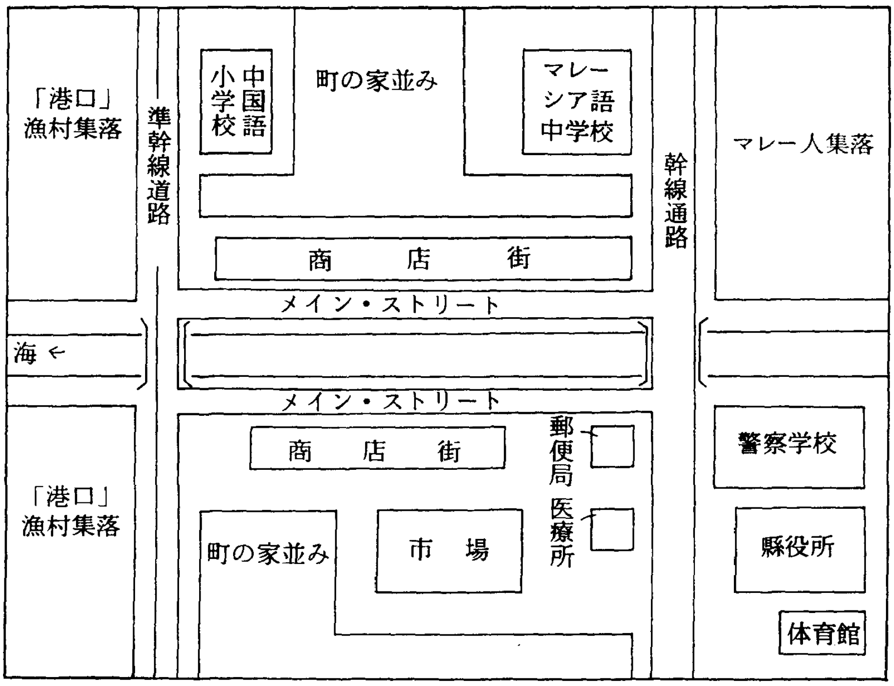

図2　町の構図（スンガイ・ブサル）

にこのオートバイ・タクシーがやってくるのは，客を運んできた時にほとんどかぎられる。子供たちや少数の村人は自転車をこいで町まで行くこともあるが，30分はゆうにかかるその道程は決して楽ではない。村の中でさえ，「巴内」や新開地IIに住む者たちが「港口」の雑貨店や喫茶店に来るのは，ひと仕事である。炎天下では暑すぎ，夜では足もとが不確かで危なっかしい。オートバイなどの交通手段に頼れない年寄りたちは，自然と「港口」に住む息子たちと同居することが多くなる。

町の空間は外に向かって開いている。村の社会空間が中心に向かう強い向心力で固く閉じているのに対して，町の社会空間は周辺部を巻きこまないではいられない。村の中心は人々を引きつけるばかりであるが，町の中心は人々を引き寄せ，そしてまたもとの場所へとはね返す。村から幹線道路に出て，南下すると，右手に中学校がみえ，やや大きな川を横切る橋に到着すると，この橋の両岸に川をはさむようにしてスンガイ・ブサルの町並みができている。橋をわたった幹線道路の左側には警察学校，その南側にサバ・ブルナム縣の役所（District Office)，そして体育館，道路の向かいには政府の医療所（*klinik*）がある。両岸の町並みをみてみよう。右岸にはホテル，映画館，理髪店，雑貨店，自転車屋，レストランなどが軒を連ね，それは町と「港口」を仕切る準幹線道路まで続く。この準幹線道路沿いには商店街のちょうど裏手に中国語小学校がある。さて，今度は準幹線道路の橋をわたると左岸にはやはり雑貨店，レストラン，本屋（マレーシア語の本を扱う店と中国語の本を扱う店がある)，洋服店，カセット・テープを売る店が続き，中ほどにタクシー乗場があり，ここには数台のタクシーが客待ちをしている。オートバイ・タクシーもここを客寄せの場にしている。少し先にはクアラルンプール—トゥロ・アンソン間のバス乗場と切符売場があり，その裏手には野菜，肉，魚を売買する市場があって，中国人，マレー人，インド人たちで賑わう。その向こうは小さな屋台の並ぶ一角で，果物，パン，日用雑

貨が売られている。幹線道路のすぐ脇には郵便局がある。商店の経営者の多くは中国人だが，インド人やマレー人の商店も何軒かある（図2参照)。

毎週火曜日の夜には夜市（*pasar malam*）がたつ。店を出すのはサバ・ブルナムやサキンチャンなど，このあたり一帯を巡回して商売をしている者たちで，車に積んだ衣料品，雑貨，生鮮食料品など，全部で100軒近くも町の空地に店を出す。やってくる客は町の周囲のマレー人であることが多い。売手は中国人，マレー人，インド人とさまざまである。村人がこうした市に顔を出すことはあまり多くない。

町に行く目的はさまざまだが，理髪店,[24] オートバイ・ショップ，医者，そして若者たちは映画館や「飯店」に，村に電話をもたない商売人はわざわざ電話をかけにいくこともある。また漁民たちにとっては，大部分の者がその会員になっている「漁民協会」がスンガイ・ブサルの町にあり，訪れることが多い。村人たちは頻繁に村とこの町を結ぶ道路を往来する。また，スンガイ・ブサルよりもやや遠くに位置するサバ・ブルナムやサキンチャンなどの町に行く村人も少なくない。村人たちの町での行動規範と村での行動規範は明らかに異なっている。町ではいつもＩＤカードを携帯していなければならず，危なっかしい場所であると同時に，村でのような互いの暗黙の監視体制から逃れられ，自由さを味わえる空間でもある。[25]

<村空間>

村人たちが月に何回かは村外の町に行くのと同様，村外の者もまた村にやってくる。海岸に近い，雑木林の奥はマレー人にとってカニのよい採取場であり，オートバイに乗ってとりにやってくる。また学校の前を流れる水路を小船で漕いできて，ブッシュの奥から薪用の枝をとっていく者もいるし，海岸で貝殻を集めてもっていく者もいる。このように近隣のマレー人が村の自然の恵みをとっていくことは少なくない。しかし，こうしたマレー人と村人とは没交渉であり，ごくたまにとったカニを村人に売るマレー人はあっても，村の喫茶店でくつろぐマレー人はみあたらない。村にはまたさまざまな物売りたちが不定期にやってくる。インド人のパン売りはオートバイのうしろに，それこそはちきれんばかりにパンをぶらさげて，警笛を鳴らしながら村を流す。中国人のアイスクリーム売りは子供たちがよいお得意さんである。ドリアンの季節にはまた町から売りにくる者がいる。そして何といっても村人たちを楽しませるのは，「功夫」（中国式の武術）の実演つきで達者な芸を披露する薬売りである。こんな時には30人以上の村人たちが屋台の周りに人垣をつくることさえある。こんな物売りたちにとって最適な場所は，「港口」の中ほどにある橋のたもとの三叉路である。

漁業活動は潮汐に大きな影響を受ける。海岸に大きな港をもたず，底の浅い川の両岸に杭上家屋をたて，その前に漁船を係留している，この村の漁民にとっては潮が適当に満ちていないかぎり，漁船の出航／帰航は不可能である。潮汐は太陰太陽暦である農暦に極めて具合よく調和する。初一と十五に干満の差は最大となり，初八，二十四前後に最小となる。満潮の時刻は日に日にずれ，ひと月の周

24）インド人の店と中国人の店が1軒ずつある。村人たちは決まって中国人の店に行く。料金は大人で 2M＄前後である。また町にはふつうの理髪店と違って「女子理髪店」という立派な看板を掲げた冷房のきいた店があり，村の若者たちの中にはこうしたところに行き，理髪以外のサービスを受ける者もいる。若者たちの間で「頭を刈りにいく」ということは女遊びをするという暗示を含んでいる。

25）実際，調査者である私に対する対処の仕方も，町での場合には警戒心が弱められ，より開放的であることが多かった。

期でまた同じ時刻に戻る。従って，毎日のトロール漁においても漁船の出航／帰航時刻は日ごとに変化し，漁民にとっての1日の仕事のはじまりは必ずしも朝とはかぎらない。初一，十五には昼間，潮がほとんど引きあげてしまう。潮がまた満ちるのは午後4時前後で，それからまた引き潮になり，翌日の早朝にまた満ちる。初五から十，二十から二十五の間はこの潮の干満の差が少なく，漁船を時間にかかわりなく比較的自由に移動させることができる。

廟の空間は村の中で特殊だが，それは簡便さからの遷移的な連続により，その空間の特殊性を高める（末尾の資料II参照)。村内にみられる最もよい事例は「拿督公」である。村の廟として認知されているものはただひとつであるが，家の前に小さな祠をつくり，それを「拿督公」と呼んでいる世帯が数多くある。また例えば，以前に使われていた旧「童子爺」廟はそのまま建物が残され，「童子爺」本来の香炉を，新たに建築されたより大きく，より美しく飾られた新「童子爺」廟に譲ったものの，いまなお，近隣の廟として参拝者を集めている。家の前に小屋をたてて（祠よりは大きい)，それを廟のように飾りたてる例もある。廟の空間は神の象徴物（像，画あるいは文字そのもの）によって権威づけられ，参拝する人々の行動様式により視覚化される。物理的構造としての建物は2次的な意味しかもたない。参拝者の多い初一，十五は廟の空間が，村の部分空間として最も明瞭にその姿を現わす時である。

村人たちが月ぎめで何かを行うことは比較的に少ない。その中で「月娘会」は月ごとのリズムを奏でる特異な存在である。毎月，日を決めて，参加者が融資の「利子」の額を決める投票をし，最も「利子」の高い者に，他の者が同じ額を融資するというのが，この会の活動内容である。全くといってよいほど，ひと月のリズムをもたないのは学校である。授業のカリキュラムは週単位で組まれ，月の中にはほとんど何の変化もみられない。

iii）1日の位相変化

<村空間>

村の1日は，日の出とともにほとんど何の変化もなく，昨日と同様に今日もまたはじまる。村人たちは気候の違いを日々の温度の違いによって表現する。*Joa* と *gan* はそのまま暑さと寒さを表わし，昼間の耐えがたい暑さの余韻が夜まで残り，寝苦しい晩となる時に，村人たちは *joa* を連発し，逆に雨が降り続いて昼なおうすら寒い時に，めったに着ないセーターや，うわっぱりを着て *gan* だといって震える。こうした *joa* でも *gan* でもない，あたり前の日々の天気の変化は大きく，晴れ間と降雨とが交互に繰り返される。

街路灯がひとつもないこの村では，夜は自家発電をとめてしまうと，あとはただ月明りに頼るばかりである。自家発電の設備をもたず，またほかの家から電気を買うこともない世帯もあり，そうした世帯では長い夜をただろうそくとランプの明りを頼りに暮らしている。[26] 夜が明けると朝もやの中で人々は起き出し，1日の仕事の準備をはじめる。商店も朝早いうち，7時すぎには店を開ける。この村では朝から男たちが喫茶店に座ることも少なくない。*Teh*（ミルク入りの紅茶）を飲み，*nasi lemah*（米飯に煎った小魚のトウガラシあえがかかっている，マレー人たちの代表的な食物のひとつ）や *bihun*（ビーフン）を食

26）自家発電の装置をもつ世帯は62世帯，そのほかに次の世帯からは他の世帯に電気が売られている。「潮」—19，「謙」—9，「成」—5，「龍」，「雲」，「金」，「玩」，「榠」—各2，「聯」，「開」，「胡」，「細」，「亮」—各1世帯。従って，電気を使うことのできない世帯数は19世帯である。自家発電の装置はディーゼル・エンジンを使った小型のもので，1969年からこの村で使われはじめた。

べる。家庭での朝食は粥や，パンのことも多い。子供たちは学校へ，幼稚園へと登校する。白の上着に紺色のズボン，スカート姿で登校する子供たちは村の時刻表ともいえる。村はずれの「巴内」から来る子供たちは自転車や，オートバイの背に乗ってやってくる。

また，村から近くの町まで働きに出る者はオートバイに乗って通勤する。村の中では「振」の母親が，自分の家で屠殺した豚を天秤棒に担いで，集落の端から端までを回り歩く。用のある家ではそこの主婦に肉を見定めさせ，適当な量を切り分け，天秤で重さを計って売っている。「沙巴（*sua pa*）」（海岸）では「謝兄弟公司」のトラクターが動き出す。海岸に堆積された粉々になった貝殻の破片を，布袋に入れて「巴内」の貯蔵所まで運ぶ。指揮をしているのは「松」の長男とその弟のふたりで，人夫となって働いているのは近隣のマレー人たち7，8人である。彼らは日雇いで，顔ぶれは必ずしも一定していない。

村の中を歩き回るのは「振」の母親ばかりではない。毎朝スンガイ・ブサルの町から「巴内」の「運」の家まで届く中国語新聞を，子供たちを手伝わせて各家に配るのは，「芝」の父親の仕事である。[27] テレビ，ラジオ，新聞などのマスコミのうち最も中国語メディアを発達させているのは新聞であり，国際ニュース，国内ニュース，さらにはサバ・ブルナム縣内の中国人コミュニティの動静をよく伝えている。村人たちはこの中国語新聞を通して，村外のより大きな中国人社会との結びつきをもっており，彼らの情報のかなりの部分を中国語新聞が提供する。またその一方で，村では英語新聞，マレーシア語新聞を購読する世帯がひとつもなく，情報の偏りを生んでいることは否めない。こうした事情は学校においても同様であり，村コミュニティの中国人社会内での閉鎖性を高めている。

「万字票」を売る村の若い女性たちもまた，村のあちこちを客を求めて歩き回る。4ケタの数字を適当に入れた「票」を買い，その数字があたれば賞金がもらえるというこの籤は，この村ばかりでなく，マレーシアのどこでも大変にはやっていて，毎晩の夢見の内容で番号を決める便利な案内まで出ている。村人たちはこの「万字票」を1ドル（1M$ は当時約100円），2ドルといった単位で買う。それは一種のゲームであり，また誰がいくらあたったかを皆よく知っているという，リスクの大きい利殖でもある。この村で売られている「万字票」は皆，実際の籤をつくっているわけではなく，近くの町に本部をおき，もっと大きな「正式」の籤の番号を借用している。中国語新聞にはほとんど毎日この種のあたり籤の番号が出ており，村の人が新聞を広げて，まっさきに読むのはこの宝籤の欄である。4ケタの比較的単純な数字であるために当選籤に近い番号の「万字票」を買っていることも多く，新聞をみるたびにくやしがるのが村人たちの毎日の習慣ともなっている。この「万字票」の売人は村の中では特殊な存在で，女ではあるが，村の男たちの空間である夜の喫茶店にも平気で票を売りにくる。彼女たちはそれぞれ村の中のある範囲内で活動を行なっているが，それはいわば彼女たち同士のなわばりであり，それが女であることによって制限されることは少ない。

＜世帯空間＞

女たちの1日は忙しい。教育が普及した今日，小学校を卒業して中学校に進む者は多いが，1，2年もせずにその多くは落伍し，女子は家庭の生活に戻り，家事の手伝いや弟妹たちの子守，そして少し大きくなると毎日の洗濯，食事の準備が彼女たちの仕事となる。

27）中国語新聞を購読している世帯は27世帯ある。その内訳は『星洲日報』—15，『南洋商報』—6，『星濱日報』—5，『通報』—1世帯である。

男子は女子ほどには役に立たない。小学校を出たての小さな体ではとても漁の手伝いはできず，[28] そうかといって家事や子守ができるわけでもない。昼間から村をぶらぶらしているのは，この種の少年たちである。女たちは昼間，日の照る時には小エビを干したり，ココアの実を乾燥させ，夜にはアイロンかけ，裁縫と手を休める暇がない。

家庭生活では1日の時刻表が，食事時間をもとにかなり定まっている。午前8時，12時，午後5時前後が朝，昼，晩の食事時であり，漁家では漁に出ている男たちとは無関係に家族が食事をする。食事の支度はもっぱら若い嫁の仕事である。台所は客間の裏手か，あるいは客間の前の前庭に（杭上家屋の場合，板を敷いて）つくられることが多く，そこに食事のテーブルがおかれている。準備ができると，まず世帯の男性成員たちに「食べないか」(*chia, chia*) と声をかける。丸いテーブルに腰をかけるのは子供を含めて皆，男ばかりである。各自ハシとごはんを盛った碗をもち，大皿の「菜」(おかず) や「湯」(スープ) からそれぞれとり分ける。男たちの食事がおわると今度は，その残りを女たちが同じテーブルについて食べる。テーブルに腰かけて食べることのできないような小さな子供（たいてい小学校入学前までの）は，母親が碗にごはんとおかずをとり分け，子供にスプーンやちりれんげで食べさせる。食事のテーブルが前庭にある場合は人目を憚ることはなく，通りすがりの人に「飯は済んだか」(*chia pah a boe*) と声をかける。このように呼びかけられて，同じテーブルにつくことはまずないが，家族が多く，また魚商などの商売をしている関係で世帯外の者が同じテーブルについているような場合は，通りすがりの者もそのテーブルに加わることはまれではない。

午前中は概ね洗濯の時であり，午後には各種の作業が行われる。もっとも漁船が帰ってくると，時刻を問わず，魚類の仕分けと清掃・補給が最優先の仕事となる。子供たち，そして一部の大人にとっては夕方5時すぎからはじまるテレビもまた，彼らに定時的な行動パターンをつくらせる。チャンネルはわずかにふたつしかないが，テレビの普及率はかなり高く，全世帯の1/3にはそなえつけられている。[29] 子供たちが最も楽しみにするのは，*cartoon* と通称される漫画アニメーションである。これは子供たちばかりでなく大人たちにも人気がある。テレビ放送にはマレーシア語，英語が主に使われ，中国語が使われるのはニュースや中国映画・中国語ドラマにかぎられる。従って，村人たちが最も好むのは中国映画で，おもしろそうな映画が放映される時は皆テレビのある世帯にこもり，村の賑わいがなくなるほどである。村人たちが最も嫌う番組は毎日，定時にはさまれるイスラムの祈りの時間のための放送である。中東のイスラム寺院のフィルムが映し出され，厳かな祈りの言葉が聞こえる時，村人たちはテレビにそっぽを向く。テレビの人気とは裏腹に，ラジオに対する関心はずっと低い。漁船に乗っている時には暇つぶしに聞いている者もいるが，ふだんの生活の中にラジオが溶けこんでいるようにはとてもみえない。[30] わずかに小学校において学校教育の放送が利用されるのみといってもよい。

世帯内の空間[31]は決して等質ではない。そ

---

28) 船上での食事の世話ぐらいに使われる者はいる。

29) 村には48台のテレビがあり，47世帯にそなえつけられている。かなりのものがカラーテレビである。

30) 村には71台のラジオがあり，61世帯にそなえつけられている。しかしながら，大部分のものはラジ・カセで，ラジオを聞くというよりもカセット・テープを聞くことに使われることがはるかに多い。

31) 中型の木造家屋をたてるには約2万M$，大型のレンガづくりの家屋の場合には約5万M$か

れは最も個別的な各夫婦の部屋から最も公共的なベランダまで，その性質を異にする。世帯構成員でさえ，世帯内での活動範囲には制限がある。各夫婦の部屋は寝室として使われる専用の空間であって，夫婦の核家族の成員以外の者がたち入ることは少ない。結婚式の時につけられる「新人房」（新婚夫婦の部屋）を表わす赤ないしピンクの幕が結婚後，2年も3年もつけられたままになっていて，その部屋の占有者を明示する例は多い。客間と台所はどの成員にとっても共用の場である。客間が神と祖先の存在によって権威づけられた空間であるのに対して，台所には厨房の神が祭られることが多いものの，厳めしさはずっと薄らぐ。また客間が世帯外の者にとっても比較的に開かれた空間であるのに対して，台所はごくかぎられた近隣ないし世帯外の親族に対してのみ開かれた空間である。オープン・スペースとしてのベランダは家の内と外とをつなぐ媒介空間となる。杭上家屋に住む村人たちに敷地の概念は乏しい。潮の干満により海水に洗われることの多い家の周囲は格好なゴミ捨て場であり，小屋の床にただ穴の開けられただけの簡易トイレは水洗式となる。

村人たちの，といっても男たちが主だが，夜の社交生活の前には「冲涼」（水浴び）が欠かせない。夕食をとりおえると，家族は順に「冲涼」をする。この海岸地域の熱帯の日差しと，ほこりっぽい村の風を1日中浴び続ける村の者にとっては，「冲涼」は衛生のためであると同時に暫しの清涼感を得る時でもある。暑さに耐えかねて日に2度，3度と水を浴びる者も少なくない。もっとも水が不足しがちなこの村にあっては，思う存分水浴びできることはそれだけ贅沢であるともいえる。彼らの水浴びに対する「信仰」は，ひとつには，この熱帯の地に移住してきたころに親から子へとしつけられてきた環境への適応反応であるといえる。女たちは，若い女に多いが，米のとぎじるからつくった白い粉を水浴びのあとにつける。これには日焼けどめの効果があると思われており，女たちの色白願望がこの習慣を広く行きわたらせている。

＜世帯外の公共的な空間＞

村に6軒ある雑貨店は，主に食料品や日常雑貨を扱っている。それぞれに特徴があり，例えば「理」の店では生鮮野菜を手広く扱っている。毎朝「理」の妻はスンガイ・ブサルの町の市場まで買出しに出かけ，午前10時すぎごろ荷台に野菜を満載したオートバイに乗って店に帰ってくる。村内にはほかに「通」の店で小規模に野菜を売っているだけなので，村の各地区から比較的まんべんなく客がやってくる。ただし，「港口」左岸の住民たちはやはり「通」のところで買うことが多い。「益」のところでは漁船のエンジンの部品を売っているし，また「錫」と「謙」のところは喫茶店も兼ねている。これらの喫茶店では清涼飲料水[32]のほかに *teh, kopi,* 中国茶が飲まれる。

世帯主にとって村の喫茶店は重要な意味をもっている。まず喫茶店に女性が座ることはない。つまり女性に対して極めて排他的である。そればかりではなく，年齢の若い者に対しても，ある程度の排他性をもつ。昼間はともかくとして，村人たちの格好の社交場となる夜には，若い男たちが喫茶店に座ることは少ない。喫茶店は基本的に世帯主である男たちの情報交換の場であり，また村の世論を形成する場でもある。喫茶店に集まる仲間たちは次のようにして決められる。夜の社交場において最も好まれる飲物は中国茶である。6

かるという。大工の工賃はひとり1日30M＄程度である。

32)「汽水」，この村の人々は *pok chui* と呼ぶ。由来はどうも栓を抜く時の音から来たものらしい。「結家寶」(*kikapo*)，「七喜」(*chikki, Seven Up*)，などがある。また，村の雑貨店でつくられる「草糎水」も安くてよく売れる。

人から8人が座れる丸いテーブルに急須をひとつおき，丸い盆の中に盃をやや大きくしたぐらいの茶碗を人数分だけおく。急須から茶碗にひと通りつぎおわると，茶碗を各自がとって飲み干し，またもとの盆の上におく。茶碗の小さいこともあって，この動作が何度も繰り返されて急須の湯はいく度もつぎ足される。同じ急須の茶を飲む者はたいてい親しい者同士にかぎられる。最初テーブルに座る者は2，3人であるが，通りがかる友人をみつけては「お茶を飲んでいかないか」(*chia teh a mai*) と声をかける。このテーブルをともにして茶を飲む仲間の間で情報がとりかわされ，共通認識が形づくられる。金銭的に余裕のある有力者たちは，このお茶のテーブルの勘定をもつことが多い。村人たちが一緒に飲み食いした時には，頭割りにして各自が出し合う「割勘」という支払い方は，まずしない。必ずその中のひとりが皆の分もまとめて払う。経済力に違いのあまりない場合には，こうして奢ったり，奢られたりで，互いの収支勘定はバランスがとれていることが多い。経済力に違いのある場合や両者が雇用関係にあるような場合には，一方が他方に奢られるばかりのこともある。この支払いを「算賬(*sunsio*)」という。清算するという意味だが，この言葉は広く，互いの金銭面以外の貸借やさまざまな関係を一旦区切る，あるいはもとに（白紙に）戻すという意味でも使われる。

「飯店」が店を開けるのは夜7時近くである。「港口」の橋をはさんで右岸に「王芝」，左岸に「月」が店を開いていた。ともに飲物は自分のところでは出さず，それぞれ「錫」と「発」や「謙」が飲物のサービスをしている。つまり「飯店」と喫茶店は共存関係にある。[33] 村人たちは仲間同士でこうした店に座り，夜食を楽しむ。肉，鮮魚，野菜を使ったさまざまな「菜」のほか，麵や潮州人の好きな粥もよく食べられる料理である。こうした夜食の折にはビールがよく飲まれる。村人たちに食物を提供するのは何もこのふたつの店ばかりではない。「港口」左岸の中ほどにある「清」のところでは時折，料理を出すこともあるし，「金」の家では毎日午後「包」がつくられ，子供たちによって売り歩かれる。[34]

村人たちの生活は賭博を抜きにしては考えられない。それは男たちにとって最大の楽しみといってもよいほどであり，トランプ，麻雀，サイコロ，「札」（数字を表わす点のついたプラスチックの板を使って数を競う遊び）など，各種のものが毎晩といってよいほど行われる。賭ける額は一般の村人たちの間では数セントから数ドルのことが多く，数十ドルを賭けるのは経済的に恵まれた者たちの間でにかぎられる。村人たちが賭ごとをしない唯一の例外は「象棋」（日本の将棋に似たゲーム）であって，これだけは金銭抜きで村人たちが熱狂する遊びである。[35] 村人たちの賭博は村外の者を迎えた時に，その興奮は最高潮に達する。実際，流れ者のように，あちらこちらの村を賭博の相手を探してわたり歩く者がいて，これらのよそ者に対抗せんと村人たちの意気は一層盛りあがる。[36]

＜漁業活動の空間＞

漁家の1日は日の出ではなく満潮とともにはじまる。港をもたず底の浅い川の岸に漁船を碇泊させている彼らはただ満潮の前後のみ漁船を動かすことができるのである。この制約は漁家をして潮の干満のリズムに

33) 特に，「錫」の敷地内に店を出している「王芝」と「錫」の関係は深いものがある。

34) 1日150個ほどつくられ，1個20セントで売られる。

35) 「象棋」については川崎［1983］参照。

36) 賭ごと好きは村人たちの一般的な性格であって，例えば学校にバレーボールをやりにきた若者たちを熱中させてゲームに誘いこむのは，両者の間で賭けられたコーラのひと瓶か「草糧茶」である。

合わせて生活することを余儀なくさせているのである。彼らは夜明け前に出航することもあれば，真昼に出ていくこともある。漁家の大部分はごく沿岸のトロール漁に従事しているため，この出航/帰航は日々繰りかえされる。

漁船での労働は激しい。トロール漁に従事することの多いこの村では漁船の大きさは数トンから数十トンであり，乗組員はひとりから4，5人である。[37] 最も多いのは2，3人での出漁である。海上での激しい労働をおえて，帰港するとまず「魚行」で売物になる魚貝類を荷下ろしし，それぞれの家の前に碇泊させる。すると，待ち受けていた家族の者が残りの漁獲物を引きあげ，早速仕分けにかかる。小さなエビは選り分けられ，日干しにされる。そのほかの魚貝類でも食用されるものは区別され，すぐに大きな鍋で煮られる。漁に出た男たちは，この種の作業に全く加わらず，ひたすら休息する。女たちが実によく働き，次の出航にそなえて水の用意や，船の掃除をする。

出漁の時間が毎日刻々と変わる漁民たちには昼夜の区別はあまりない。家に戻ってくる時は休息の時である。従って昼でも寝ていることは少なくない。そして，こうした労働と休息の間に彼らの娯楽がはさまれる。いまでは週休みという習慣が村にも浸透し，日曜日に出漁する漁民は少ない。「魚行」では漁船を迎える準備をはじめる。潮の加減によって漁船が帰ってくる時刻は異なるが，だいたい朝9時ごろから夕方7時ごろまでの範囲である。「勤」や「潮」のような大きな「魚行」では製氷機をもっていて，自分のところで氷をつくる。まず製氷機から氷をとり出すのが彼らの第1の仕事となる。荷詰め用には氷を細かく砕く必要があり，砕氷機で予め細かな氷塊を用意しておく。漁船が「魚行」の桟橋に横づけされると，次々に漁獲物が荷揚げされる。すでに漁民たちの手によって大まかに仕分けされていることが多いが，さらにまた魚行において女たちも加勢して分けられる。それぞれの魚種ごとに重さが計られ，伝票にその量が記載され，漁船主にわたされる。この秤を読んで大声で目方を叫ぶ時が最も「魚行」の活気づく時であり，「魚行」の「老板」の顔が輝く時でもある。計量された魚貝類は売りわたされる卸商ごとに，氷塊とともに箱詰めされる。全ての漁船が到着しおわると，魚貝類の箱は運搬業者[38]によって，船でスンガイ・ブサルの町まで送られ，そこからトラック便で各地の卸商のところに送られる。この運搬船はまた漁船の燃料となるディーゼル油を「魚行」まで運び，それぞれの燃料タンクに給油する。魚貝類を積み出しおわった漁船には新しい氷と水，燃料が補給され，翌日ないしその日の晩の出航の準備が整えられる。

漁業活動には1日の規則的なリズムを見出すことはできない。トロール漁においては，出航，漁，帰航，荷揚げ，魚商での売買，家での仕分け，漁船の清掃・補給という一連の活動が24時間のうちにひとつのサイクルを閉じる。しかし，このサイクルは日ごとに開始時間がずれ，ひと月を経ずにはもとに返らない。従って，漁民にとっての1日のリズムは，太陽ののぼり，降りではなしに，漁船か

37) 10トン以下―29隻，11-20トン―21隻，21-30トン―4隻，31-40トン―2隻，41トン以上―5隻，そのほかに *sampan* と呼ばれる小船が6隻の計67隻が通常の漁に使われる。

38) 村の者ひとり，スンガイ・ブサルの者ひとり（「勤」の親族）がやっている。この運賃はスンガイ・ブサルまで，ひと箱3M$，スンガイ・ブサルから例えばバトゥ・パハット（Batu Pahat）までのトラック便のひと箱あたりの値段は10M$，そして箱代は2M$，氷代なども合わせると，ひと箱を魚の卸商まで送り出すのに15M$ぐらいかかるという。

らの乗り，降りによって決まるということができる。

＜学校空間＞

朝８時すぎ子供たちは学校[39]へ集まってくる。１年生から６年生まで１学年１学級ずつ６学級あるこの学校では，総勢200人あまりが学んでいる。教職員は校長ひとり，教員６人（うちひとりは語学教師のマレー人），用務員３人（うちふたりは近隣のマレー人）の構成となっている。登校してきた子供たちはカバンを教室におき，コンクリート敷きのバスケット・コートで遊ぶ。鐘の合図とともに子供たちは学年ごとに整列し，簡単な朝会が開かれる。それから各学年ごとに分かれて，それぞれの教室で授業がはじまる。２時限目の授業がおわると，少し長い休憩時間があり，子供たちは学校の canteen（軽食堂）で思い思いの軽食をとる。この canteen での休憩時間が子供たちにとって一番楽しい時であり，争って売子（村の若い娘ふたりがやっている）に殺到する。その後４時限目ないし５時限目まで授業があり，子供たちは午後１時前には学校から家へと帰っていく。午後には正規の授業はないが随時，補習が行われる。子供たちの中には昼食後，学校に遊びにくる者もいる。特に本好きの子供にとっては学校は村の中で唯一の図書室であり，本をむさぼるようにして読んでいる。

学校は子供たちにとって異質の空間である。ここでは規則として北京語を使わなくてはならない。家庭での常用語である潮州語を話すことは禁止されている。この規則は授業時間はもちろん，休み時間にもかなりよく守られており，上級生になればなるほど，この異質な空間に適応していく。授業時間の半分は語学の学習にあてられ，１，２年生はマレーシア語と中国語をほぼ１対２の割合で，３年生から６年生はそれらに英語を加えた３カ国語を，やはり中国語を主にして勉強する。語学以外の教科書は全て中国語によって書かれており，中国語の理解力が他の科目の学習にあたっても大きな意味をもっている。語学の次に大きな比重を占めるのは算術である。自然科学は低学年から継続的に，公民，地理，歴史といった社会系の科目は４年生以上の学年で重点的に教えられる。そのほかに図工，体育，健康教育，音楽などが各学年を通して教えられる。[40] 子供たちが最も好む科目は中国語，体育などであり，逆に最も嫌いな科目はマレーシア語，英語である。特に，これらの科目を中国語を全

39) 学校の建物は60数年前に最初のものが私塾のような形でつくられ，いまは遊戯場として使われている左岸の橋のたもとの建物が1947年にたてられた２番目の学校であり，現在使われている校舎は1957年のマラヤ連邦独立の年に政府によってたてられたものである。

40) 1981年度のこの村の小学校の各科目の配分時間は，次の通りである（単位は分）。

1981年度の学年別科目時間配分表

科目＼学年	１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生
マレーシア語	240	240	240	240	240	240
中国語	420	420	420	420	360	360
英語	—	—	150	180	210	210
自然科学	90	90	90	120	120	120
図工	120	120	90	90	90	90
体育	90	90	90	60	90	90
健康教育	60	60	60	30	40	40
地方研究	30	30	30	—	—	—
公民	—	—	—	60	60	60
地理	—	—	—	90	90	90
歴史	—	—	—	90	90	90
音楽	30	30	30	30	30	30
分組活動	—	—	60	60	120	120
算術	210	210	210	180	180	180
総計	1,290	1,290	1,470	1,650	1,720	1,720

く理解しないマレー人の語学教師（*Cikgu*）[41]にならうような場合は，授業をほとんど理解できないということもしばしば起こる。5年生の全国的な統一試験があるので，その前には英語，マレーシア語の補習が特別に5年生のために行われることもある。

教師たちは午後を教材づくりや試験の採点などですごす。この間に村人たちが来て，さまざまな用事を片づけていく。マレーシア語に関して文盲である大部分の村人たちにとっては，政府や州の漁業局からの文書やさまざまな申請書類はとても手に負えるものではなく，子弟の教育以外のことでも教師の助力を仰ぐことが多い。村の若者たちにとってはバスケット・コートや広い運動場をもつ学校は格好の遊戯場である。サッカーやバレーボールをしたり，木陰でおしゃべりを楽しんだり，また広い運動場にオートバイで乗りこんでストレスを発散させる。夜は教師たちにとっては休息の時間であり，娯楽に大部分の時間がさかれる。夜はまた学校空間の存在をひときわ浮かび上がらせる。建物の中の電燈と同時にともされるバスケット・コートの明りは格別まばゆく，暗闇に電燈の明りがみえかくれする村の家並みとは好対照をなしている。[42] 教師たちにとって最も羽根が伸ばせるのは，近くの町にバドミントンをやりにいったり，夜に映画をみに出かけていく時であり，村の中では決して緊張は緩まない。午後に1回やってくる郵便物の整理も，教師たちの重要な仕事になっている。村内にも形式的に住所の地番がつけられているが，ほとんど使われておらず，村宛の郵便物をマレー人の郵便配達夫が正確に届けることは困難である。そこで，配達夫は郵便物を一括して学校に預け，教師がそれを子供たちに委ねて宛先の世帯に配ることになる。郵便物の宛名にはローマ字表記だけのものも多く，宛先が特定できない郵便物が少なくない。たとえ漢字の表記が添えられていても，村の住民全ての氏名を教師が把握することは困難であり，[43] 配達は必ずしも正確とはいえない。村人たちにとってはローマ字アルファベットは無縁であり，自分の身分証明書に名前がどのように表記されているかさえ知らない者が大半である。自動車やオートバイの免許をとるために，彼らがどうしてもマレーシア語をならう必要がある交通規則の教則本には，マレーシア語が漢字表記されている。[44]

村人たちの存在が学校空間においては奇異に映るように，学校の教師たちの村空間での存在もまた尋常ではない。このふたつの空間を自由にわたり合えるのは，どちらの空間の支配者でもない子供たちである。学校空間のもつ規則性は，例えば教職員たちが皆，月給制のサラリーマンであることにも現れる。日々，水揚げ高が変わる漁師や，肥育した豚の売買に主な収入源をもつ村人たちにとっては，毎月一定額の給料[45]をもらう教師たちの

41) 中国語小学校のマレー人教師は *Cikgu*（先生）と呼ばれることが多い。彼の立場は大変微妙である。学校での共通語である北京語を解することができず，校長やほかの教師とはマレーシア語でやりとりするものの，生徒たちとのコミュニケーションにおいては，生徒の側のマレーシア語能力の低さゆえに不十分なものになってしまいがちである。また教師たちの間にあっても，ひとりだけオートバイで通う彼だけが教師集団から浮き上がり，疎外される傾向にある。

42) もっとも，この強力な明りのせいで学校は時折「臭虫」の大軍に襲われ，全部の明りを消さないではいられない事態に至ることもある。

43) 村人たちの姓名のローマ字読みは便宜的で規則性に乏しい。基本的には漢字の潮州音読みであるが，ひとつの漢字に対して決まった表記法はない。

44) 例えば，*Berhenti di simpang jalan*（不横地，利新邦，惹蘭），*Jaga kanak-kanak sekolah*（加卡，干那干那，士哥拉），*Jalan bahaya*（惹蘭，峇哈牙）など。

45) 40代の校長が約1,100M＄，20代から30代前半の若い教師が400-500M＄，用務員が350-400M＄である。

経済生活は容易に理解できない。学校の教師たちと村人たちの間にあるギャップはその中間的な存在，つまり村外の学校に学んでいる村人の子供たちによって埋められる。彼らは村の世帯に属するが，常住するわけではなく，村外の学校空間に適応しており，中国人たちにとっての学校空間の媒介言語である北京語やその地域で広く使われる方言に通暁している。たまさかの休暇に村に帰ってくると，世帯空間には容易に適応できても世帯の外で彼らが容易に近づくことができるのは，むしろ世帯外の村人たちよりは学校の教師たちである。休暇の間にはこうした若者たちが三々五々学校を訪れては，しばらくの会話を楽しんで帰っていく。

IV　村空間の非周期的位相変化——攪乱要素

村の社会空間は周期的な位相変化をする一方で，また非周期的な位相変化もする。非周期的な位相変化は大きく分けて3種類ある。第1に通過儀礼的なものであり，第2に異常事への対応，第3には異質な要素の村への混入によって引き起こされる。

i）通過儀礼

通過儀礼が村の社会空間に及ぼす影響は甚だ大きい。なぜならば，通過儀礼こそは社会位相空間の重要な担い手である村人の特性そのものを変えてしまうからである。当然，個々人の特性の変化に対応して，社会関係も行動様式もともに変化を余儀なくされる。また通過儀礼の時には，こうした急激な変化の緩衝帯として，一時的に村人たちに共有される特殊な社会空間が形成されることも重要な点である。

葬式は通過儀礼の中で最も大きな意味をもっている。村人の死はまさに村空間の構成員の変化を意味し，村人は死を契機にこの世の生ける村人からあの世の祖先へと十分に様式化された「別れの過程」を通して特性を変化させる。[46] 村は村人の死により非日常的な社会空間へと変化し，墓地での葬儀をおえるまで日常的な社会空間へは復帰しない。また，死者を出した世帯では非日常的な空間が100日目の服喪明けまで続き，この間はずっと日常活動に戻った村空間の中にあって，極めて特異な世帯空間としてある。

結婚式は葬式につぐ重要性をもっている。しかしながら，そのもつ意味は世帯内において大きく，ほかの世帯の村人たちに与える影響は葬式ほど大きくはない。つまり，葬式が村空間全体に大きな衝撃を与えるのに対して，結婚式は村空間のある特定の部分にしか影響を及ぼさない。このことは，葬式への参列がどの世帯にとっても必須であるのに対して，結婚式の宴への参加は選択的であることからもうかがえる。結婚式を催す世帯にとっては，結婚は世帯空間の新たな編成を起こさずにはいられない。つまり新婚のカップルの寝室を彼ら専用の空間として世帯内に創出しなくてはならない。新郎・新婦はこの寝室を拠点として，世帯内での活動を行うことになる。

村人の出産は新たな村の構成員の誕生を意味する。従って，そのもつ意義は決して小さくない。その世帯にとっては，特に子供が男の子である場合，将来にわたっての貴重な財産であり，世帯を通して継承される文化伝統の重要な担い手となることが期待される。しかしながら，子の誕生が村空間の中においてもつ意味は結婚式よりさらに小さく，わずかに親族や近隣の間で祝われるばかりである。むしろ村空間にとってより大きな意味をもつ誕生とは老人の生誕を祝う集いであり，こう

46）S 村における葬式の詳細は川崎［1985a］を参照のこと。

した催しは本来の誕生日にこだわらず，1年に1度適宜催され，親族や友人・知人を招いて，その主催者である老人の息子の社会的な影響力と，そのインフォーマルな集団の結束力を世帯の内外に印象づける。[47]

ii) 異常事

通過儀礼が予期され，準備される性格を強くもつのに対して，異常事はそれが自然発生的なものであれ，人為的なものであれ，突発的であるのが特徴である。このような異常事に村人たちは積極果敢に対応する。

村が辺境に位置しており，利便性に恵まれていないがゆえに，自然の気象変化によって大きな影響を受けやすい。ちょっとした風や雨でさえ，漁民たちの出漁を見合わさせる原因になりかねない。海べりにあるこの村の悩みのひとつは潮水の高漲である。年にいく度か（特に春分・秋分の前後）異常に潮位の高くなる時があり，そんな時にはこの村は海水でおおわれてしまう。この塩害のおかげで村の土地には稲が育たず，わずかに植えられる野菜類の生育もはかばかしくないことが多い。道路は至るところでくずれ，この異常な潮位を楽しむのは，臨時のプールとなった家の周りで泳ぐ子供たちだけである。ちょっとした大雨もまた，この村をすぐに水びたしにしてしまう。降ったが最後，平坦なこの村の中ではどこにも水の流れるところはなく，2，3日水びたしのままでいることも珍しくはないのである。そのために道路はある程度周りの土地よりも高くされているが，くずれやすい赤土が粘土状の土台に乗せられているだけなので，年中まともには通行できない状態になってしまう。

村の生活はふだんは平穏にすぎていくが，水不足がまたある意味で村を活気づける。水道管は「港口」地区の家々にも敷かれているが，慢性の水不足に悩むこの村では，水道管から水の出る家は「巴内」と新開地の地区の住民にかぎられている。「港口」に住む者たちはふだん使う水のほとんど全てを天水に頼っている。少しでも日照りが続くと，彼らの家の水がめはたちまち底をつき，「港口」の人々は親族，姻戚などを頼りに，もらい水に走らなければならない。村の中を水桶を積んで走るオートバイや，水浴びや洗濯に「巴内」に行く人々が始終村の中を往来する。あまりに水不足が深刻な時にはスンガイ・ブサルの町から給水車が来ることもあるが，その効果は少なく，結局は天の恵みに頼らざるを得ない。

人的な過失が原因の事故もまた，村空間に大きな衝撃を与え，村人たちに迅速な対応を迫る。最も村人たちに恐れられているのは火事である。村の魚商たちはそれぞれディーゼル油のタンクをもち，もしこれらのタンクに引火したら，それこそ村中が火の海になることは誰でもがよく承知していることである。筆者の滞在中にはわずかにボヤが2件あっただけであるが，村人たちの反応の早さには驚くばかりであった。[48] 実際この村には火事の

47) この種の催しに最も頻繁につくられるのが，スチーム・ボートと呼ばれる水炊き風の鍋物であり，長命を象徴する麺が最後に食べられる。

48) 1度は夜中筆者が寝ている時に起こった。何ごとか人々の集まるざわめきがして，それは異様に大きく何か事件が起こったと感じさせるに十分なほどであった。筆者が学校の宿舎を起き出して，門のところまで行くと，何と村人たちが手に手にバケツをもって列をなしている。幸い火災はすぐに消されて何ごともなかったのだが，人々の興奮はまださめやらず，声高に火事のようすを話している。2度目はもっと劇的な場面であった。ちょうど「法師公」の潮州劇を上演している時，筆者は舞台の横の喫茶店で村人たちと夜食をとっていたのだが，突然「大火」と叫ぶ声が聞こえる。筆者と同じテーブルにいた連中は声が聞こえるか聞こえないかのうちにもう駆け出して，橋の向こう岸に向かって突進していった。それは10人や20人などというもの

ための防災組織など何もできてはいないのだが，人々の防火意識はこの村を守るために一致団結するようにできている。日ごろは仲のよくない連中もこの時ばかりは協力し，みごとなチームワークがとれている。筆者にはこの防火意識が村のまとまりに役だっているとさえ感じられたほどだった。また，正規の免許をもたない多くの漁民たちにとっては，本来自分たちを守ってくれるはずの「海警」も出漁を断念させる原因となったり，さらに最悪の場合には海上で拿捕され，裁判にかけられたうえで罰金まで払わされるはめにあうこともある。

異常時とは日常と異なるある状況の出現であり，それは必ずしも村人たちに不利益ばかりをもたらすものではない。非日常の出現は，言い換えるとある種の状況の落差が創出されたことを意味し，この落差こそは商売という価値の違いを儲けという値千金のものに変換する行為にとって不可欠なのである。村人たちは誰でもが小さいころから，この状況の落差を金儲けにうまく利用する法，つまり商売感覚を身につけている。村人たちの金儲けに対する熱意はいろいろなところに現れる。例えば，かたつむりの値段がよい（1斤30セント）という話が伝われば，それこそ村中「かたつむり熱」に浮かされる。バケツをもってかたつむりを探すのは子供たちばかりではなく，大の男や家庭の主婦までも巻きこんで，村の中から，よりブッシュの奥へ，より遠くへとかたつむりを求めて稼ぎ出す。こうしたことに対する村人たちの熱意はすさまじく，それこそ金儲けの手段を知っていて，それをしないのはバカだと思われても仕方のないことなのである。彼らにとっては稼ぐ額が問題なのではなくて，稼げる時には何としてでも稼ぐという精神が問題なのである。村人たちはまた商人でなくても随時一時的な商売をはじめる。例えば，サトウキビの茎を売り歩いたり，トウモロコシを売ることは，安く大量に手にはいり，儲けが期待される場合には容易に企てられ，実行される。小学校の軽食堂にたまたま働く者がなく，しばらくの間一時的に閉鎖するという話を子供から聞けば，すぐに学校近くの雑貨店では，こうした学校の子供たちを目あてにホットケーキを焼いて，道端で売りはじめる。もちろん，学校の軽食堂が再開されるまでの一時的な商売だが，こうしたことにためらいはなく，そのやり方に対して誰も文句をいわずに，儲かれば「あいつは賢い」という評価が，損をすれば「たいした商売ではなかった」という評価がくだされる。

iii）異質な要素の混入

異質な要素の混入については，この村のもつ文化的な同質性が背景となる。村人の95パーセント以上が潮州人であり，中国本土の広東省澄海縣金砂郷・外砂郷という極めて狭い地域の出身者およびその子孫からなるこの村では，異質なものの混入に対して過敏な反応を示す。ここでいう異質なものとは，よそ者潮州人，非潮州系中国人，マレー人，インド人などに分類できる。

よそ者潮州人，つまり村外の潮州人が村にやってくることは決して多くない。最も頻繁にやってくるのは，かつて村に住んでいて，いまは村外に移り住んでいる潮州人たちである。彼らは村に親族や知人・友人をもつことが多く，村人たちも彼らをほとんど常住の村人同様に扱う。このような「もと村人」でないようなカテゴリーには，近隣の潮州人漁村

ではなく，それこそ怒濤のように一群が駆け抜けていった。筆者は呆然として事態の成行きを見守ったが，5分もしないうちに何人かは帰ってきて，火はすぐに消しとめられたことを報告した。喫茶店に戻った村人たちは，もはや夜食の続きどころではなく，興奮しながら火事のことを話し続けていた。

の住民や近くの町の住民たちがはいる。彼らが村にやってくるのは，友人・知人の結婚式や老人の誕生日に客として招かれるか，あるいは葬式の弔問に訪れる時を除いては，「童子爺」廟の生誕祭の時に村にやってくるぐらいしか機会はない。こうした時には世帯空間や村空間は外に開かれており，その開かれた窓口からよそ者たちも村に迎え入れられるのである。こうした非日常の場を除くと，商売で村に出入りする者のほかには，よそ者潮州人が村にやってくる機会は驚くほど少ない。そのまれな例外は，バスケットボールの試合をしにやってくる近隣の潮州人漁村や町の若者たちである。バスケットボール・ゲームはこの村で特殊な地位をもっている。ひとつには村の選抜代表チームがかつてあり，いまもそのユニフォームとかつての選手たちが残っていることであり，もうひとつにはバスケットボール・ゲームがこの村にかぎらず中国人たちの間で盛んに行われる競技で，どの村の小学校にも立派なコートがあり，ほかの村の代表チームが親善試合にやってくるという点である。バスケットボールの試合は，唯一この村の者が演じる娯楽である。[49] 学校のバスケット・コートには明りがつけられ，コートの周りのベンチには50人以上の村人たちが座る。レフリー役の合図で試合がはじまると盛んに声援が送られ，真剣に勝敗が争われる。

潮州語のメロディーが充満しているこの村に，非潮州系の中国人がやってくることは容易ではない。婚入してくる若い女性は例外的で，比較的多くの非潮州系中国人が結婚を機に村の世帯に組みこまれる。彼女たちは世帯外に出ることは少なく，世帯空間への第1次的な適応ののち，子供を生み，今度は子供を通して世帯より大きな村空間の中のさまざまな社会空間に適応していく。もっとも男たちに比べて家庭の主婦の活動範囲は狭く，このことも彼女たちのような非潮州人の潮州語世界への適応を容易にしているといえる。婚入してくる女性のほかには，商売人として村の雑貨店や喫茶店と取引関係をもつ者が村にやってくる。しかしながら，彼らは村人たちと単に経済関係のみをもつだけで，その社会関係は契約的で持続性が短く，また非個人的であることが多い。最も村人たちと意味のある関係をもつのは，村の支部を介してつながる中国人の政党，「馬華公会」（マレーシア中国人協会）のさまざまなレベルの幹部たちである。これらの非潮州系中国人とは中国人という共通の経済的・民族的利害を基盤にして結びついている。言葉の壁も，村の顔役たちの多くが北京語を話せるようになった今日では，かなり薄くなっている。

村人たちに最も警戒され，恐れられるのはマレー人である。なぜならば，マレー人は政府・役人と強く結びついてイメージされており，絶えず政府・役所からの厳しい統制を受けながら，その間隙を縫って経済活動をしている村人たちにとっては，マレー人自体が彼らの監視役のように思えるからである。実際，この村を訪れる警官，漁業局の役人たちは決まってマレー人である。警察官や漁業局の役人たちに対する対処の仕方は特異であり，これらの異質の要素が村にいる間は，いわば村全体に緊張状態が持続しているとさえいってよいほどである。この対応の仕方を生体とのアナロジーで考えるならば，村というひとつの個体内に異質の要素である「抗原」がはいってくると，「抗体」となるべき村の顔役たちが，これらの異質の要素を補足し，生体内のほかの部分，つまり村人たちに影響をなるべく与えないように，体外つまり村外に導き出すのである。この抗原—抗体関係は

49) 以前には卓球やバドミントンなどの各種のスポーツ大会への参加も活発で，また農暦新年には「のど自慢大会」も開かれたというが，現在ではそのような組織的な娯楽活動は行われない。

また，抗体である顔役たちが頻繁に村外に出ていき，抗原との間にある程度親密な関係をつくることによって維持・強化される。この関係はまた，村民が村外において何らかのトラブル，例えば「海警」に拿捕された時にも，その村人を守るために活用される。もちろん，その場合に抗体となるのは，当該の村人と深い結びつきをもつ顔役である。逆に村人たちの労働者として雇われるマレー人，インド人に対しての警戒心は緩められ，村人たちが考えることはいかに安く彼らを働かせるかということだけになる。最も下層の肉体労働者として使われるインド人との関係は極めて契約的であり，そこには私的な感情のはいる余地は全くない。

おわりに

社会は時に，あたかもそれが無機物質の集まりであるかのように，システム論的にも分析可能である。しかし，社会が何よりも物質システムと異なるのは，その構成要素が常に発展性を内包し変化し続ける生命体の人間である点にある。社会には人間のもつ生のダイナミズムがより複雑化され重層化された形で現れる。本稿で試みた社会位相空間論とは，人間社会のもつこの律動的な側面をひとつの村を通して考察したことにほかならない。

人間の生命が神秘的であるように，社会の起源もまた謎に包まれている。われわれ人間がどこから来てどこに行くのか，自分自身の知覚のうちに十分には認識できないように，社会の発展形態の将来もその起源とともに不確かである。われわれ人間には瞬間，瞬間の，いまという現在を意識的に生きるというほかには術がないように，社会に対する態度もわれわれのとらえられる社会の実相を現在という瞬間で認識し，知りえるかぎりの過去を将来に投影しながら，個々人としての決定をなすほかには選択の余地がない。

村の中でひとり，村人たちのつくり出す社会空間から独立的な存在でいようと努めたが，ついには否応なく巻きこまれ，村を離れて3年あまりにもなるいまでさえ，村人たちからの無言の吸引力を感じないではいられない。1985年11月8日に村人たちと筆者自身の明日の社会空間を心に思い描きながら，今日の1日をおわりたい。

＜付記＞本稿のイメージの原形は，1984年12月に若手中国関係研究者の“秘密結社”「仙人の会」月例会で発表し，またさらに焦点を絞って1985年3月に京都大学東南アジア研究センターで開かれたセミナー「民族誌の方法をめぐって」で発表した。このふたつの研究会で参加者の皆様からいただいた貴重なコメントは，原形イメージを文章として定着させるにあたって大変役にたつものであった。あらためて心から感謝する次第である。

資料I　「童子爺」生誕祭のあらまし

辛酉年（1981年）の「童子爺」生誕祭の概略は，以下の通りである。

「童子爺」生誕の日，四月二十八日の1週間ほど前から，世話役たちによって廟の内部はていねいに掃除される。炉にささったままの線香の燃えさしはとり除かれ，ほこりをかぶった各種の神像は磨かれる。「戯台」（舞台）[50] の前には板をはった簡便な座席がとりつけられる。その座席の周りを囲うように

50) 潮州劇の舞台は次のような構図をもっている。舞台から観覧席に向かって右手に「鼓」，「鑼」，「鐘」，「板」などの楽器の演奏者，左手に「胡」，「琴」，「喇叭」，「笛」などの楽器の演奏者が座り，その横には照明や幕の上げ下げを操作する者がいる。舞台の奥には背景用の布がいく枚もつり下がっている。この背景の左手奥には合唱をする者が数人いる。そして舞台の裏手には，それぞれの役者ごとに化粧台（衣装箱の上に鏡と化粧道具のはいっている小箱を乗せたもの）がいくつも並べられる。一番奥には劇団の神が小さな祭壇に祭られている。役者は舞台の左手から奥にはいり，化粧や衣装替えをして，右手からまた舞台へと出ていく。

して「亜答」(*atap*，ヤシ科の植物の葉を乾燥させたもの）屋根を葺いた小屋が7，8棟たてられる。

四月二十五，朝7時すぎオートバイの背に乗った村人がドラを鳴らしながら学校の前を横切る。「拿督公」と「将軍爺」の香炉がこのオートバイによって運ばれ，「戯台」に対するように「童子爺」廟の前につくられた，ふたつの仮設の「亜答」屋根葺きの小屋にそなえつけられる。「童子爺」廟の前には供物用のテーブルがおかれ，その横（廟に向かって右手）に「天公亭」と書かれた紙製の家がおかれ，子供の背丈ほどもある太い線香が3本大地にたてられ，もうもうと煙をあげている。さらに観客席と廟の間には7，8メートルほどの高さの旗ざお（木の枝）が4本たてられている。[51] 午前8時すぎ，シンガポールからやってきた潮州劇団が，大道具・小道具を満載した大型トラック2台と団員たちを乗せたバス1台で，村にやってくる。トラックの1台は「戯台」に横づけする前に軟弱な地盤にタイヤをとられて立往生し，仕方なく村人たちが道具を次から次へと「戯台」まで運ぶ。午後2時すぎ，さっそく潮州劇がはじまる。前の座席には小さな子供たちが，まるで農暦新年のように真新しいきれいな服を着て，みている。大人たちは周りの出店や「童子爺」廟にたまっている。出店を出しているのは村人ばかりでなく，村外の者もいる。また劇団も店を広げ，漢方薬などを売っている。昼すぎ，女性のいく人かはもう「童子爺」廟に参拝している。夜になっても拝む人はいるが，男性は少ない。ただし皆，線香で拝むのみで，供物はささげない。夜の劇をみに繰り出した人出は昼間よりずっと多い。

四月二十六-二十七，連日，潮州劇が演じられ，「童子爺」廟に参拝する人は多い。若者たちも線香をもって慣れないようすで拝んでいる。上席である前の方の席には，おばあさんや中年の女性が目だつ。町と村の間をオートバイが頻繁に往復し，久し振りに村に帰ってくる若者，また他の村や町から潮州劇をみにくる人々で村は賑やかだ。

四月二十八，朝8時すぎにはもう「童子爺」廟に参拝の人が多い。廟のベランダにはオスの豚と羊が1頭ずつおかれている。両方の口にはオレンジがくわえさせられている。腹が裂かれ，内臓がぶらさがっている。今日はこれまでとは違い，供物をもって参拝しにきている。供物は毎月，初一と十五に各廟に参拝する時のものと変わらないが，量はずいぶんと多い。夫婦ふたりで来る者も多いが，ふたりではもち切れずに，数人で籠をさげてくるか，あるいは棒に供物のはいった大きな籠をかけて担いでくる者たちもいる。参拝はやはり女が多い。

午前8時すぎ，十数年前から「童子爺」廟の霊媒（*tangki*）になっている「瑞」（すでに漁夫を引退している50代の村人）のトランスがはじまる。上半身裸体，半ズボン姿の「瑞」が「童子爺」廟に駆けこんでくる。この時にドラと太鼓が激しく鳴らされ，「瑞」の興奮状態はそれにつれて高まる。あまりに興奮状態が続くので，「祥」がドラと太鼓を一時やめさせる。それでも引き続きトランスの状態は続いていて，それを押えるようにして赤い頭巾，上着，ズボンを周りの者が着せる。この間にも「瑞」は何かブツブツといっているが，聞きとれない。着替えおわると同時に祭壇にそなえてあった生米を周りにいたひとりの者があたりに振り撒く（これをみているのは男たち7，8人)。このあとから「瑞」は始終言葉を吐き続け，それを周りの者が必死に聞きとる。祭壇に飾ってあった旗と刀をひとつずつもってきて，「瑞」にもたせる。「瑞」は以降ずっと左手でこれをもち，肩に担いでいる。「瑞」が右手で「茶杯」を割り，その破片で舌に傷をつけ，その血を黄色い紙に塗りつける。かなりの枚数となる。この紙はあとで各世帯に配られ，それぞれの家の戸口にはられる。さらに「瑞」は言葉を吐き続けて，それを周りの者が紙に書きつけている。何か物をもってこいというようなことをいうらしく，周りの者が走ってそれをとってくる。トランスの状態のおわりを告げるように机を激しく2，3度叩き，大きく息を吐く。それをみて周りの者が刀と旗をとり，服を脱がせる。トランスのおわった「瑞」は水を飲み干す。

午後2時すぎ，また「瑞」のトランスがはじまる。午前中と同じ姿の「瑞」が祭壇の横にたち，眼をつぶって何かブツブツと呪文のように唱えている。外では太鼓とドラが鳴らされているが，午前と

51）「元師爺」,「廣澤尊正」,「童子仙師」と黄色い布に赤字で書かれている。1本は旗ざおだけであった。

違って子供たちが叩いている。それでもしばらくしてトランスの状態にはいる。午前中と同様に赤い服を着せる。米と水を周りの者があたりに振り撒く。刀と旗が1本ずつ「瑞」にわたされる。「瑞」が言葉を吐きはじめ，周りの者が聞きとろうとするが，なかなか通じない。午前中の「通訳」であった「浩」，「昌」たちは紙銭を燃やしにいっており，この場にいない。ほかの者たちが何とか聞きとろうとするが手に負えず，年寄りの女性に助けを求める。しかし，それもなかなかうまくは通じない。コミュニケーションにだいぶ手間どる。周りの者が何度か確かめるようにして聞きなおしている。これをみている観衆の数は午前中の時よりもずっと多く，老若男女を問わず，4，50人がとり囲んでみている。途中，潮州劇団の俳優が「童子爺」に参拝にくるが，「瑞」のトランス状態が続いていて結局祭壇のそばには近づけず，少し離れたところから拝んでいる。右手で「茶杯」を割り，その破片で舌に傷をつけ，その舌から出る血を使い午前中と同じように黄色い紙に赤く塗りつけている。そのあとで今度は小筆をもってこさせ，朱色の墨汁で何か字を書く。書いたあと，それをなめ，周りの者にわたす。それは今度は「潮」の母親にわたされる。彼女はその2枚の紙をどこかにもっていった。「瑞」は何か言葉を吐き続けるが，周りの者は聞いているばかりである。午前中と同様に机を2，3度強く叩き，トランス状態から正常の状態に戻る。旗と刀をとり，服を脱がせる。

夜7時すぎ，「戯台」では相変らず潮州劇が演じられている。ただ，雨が降り出したので，観衆は皆，屋根のある前半分の座席に移動し，男たちは「童子爺」廟の中に15，6人たまっている。「卜占」（*poe* と呼ばれるふたつひと組の木を使ってする占い）で来年の世話役を決めている。廟の横の壁には潮州劇の寄付金の一覧表が赤地の紙に黒字で書かれている。村外の者の名前もみえる。

四月二十九-五月初二，この間ずっと昼・夜の公演が行われる。五月二日の晩，最後の興行がおわると，潮州劇団の一行は次の目的地である雲頂高原(Genting Highland) へ向けて旅だっていった。

五月初三，「拿督公」，「将軍爺」の香炉がもとの廟に戻され，仮設小屋も出店の小屋と同様，片づけられる。

資料II　村の廟のあらまし

村の廟を「拿督公」から子細に観察してみよう。「港口」左岸，海岸にほど近いブッシュの中にある「拿督公」の建物には，赤地に黒く右から左に「那啅公」（音は「拿督公」と同じ）と書かれている。ベランダの上には，木製の飾りがつけられ，そこにもやはり，右から左に「那啅公」の文字が木に細工されている。建物の真向かいにはコンクリート製の「天恩公」の台がしつらえてあり，その廟に向かって右横には鍋のような形をした大きなカマドがおかれている。建物の入口の両脇の「双聯」には向かって右に「拿管梅中捕魚虾」，左に「督偶盈船回歸」と赤地の板に黒く書かれている。内部には一番奥に香炉のおかれている背の高い台，その前に大きなテーブル，さらにその前により小さなテーブルがおかれている。小さなテーブルの前には「八仙と獅子」をかたどった幕がつけられ，台の上にはろうそくたてと「卜占」のための木がおかれる。大きなテーブルには燈明，さびついた剣4本，線香たてがおかれる。奥の台には向かって左から順に無名の香炉，「拿督公」と書かれた香炉，無名の香炉，「拿督公」と書かれた香炉ふたつの計五つの香炉がおかれてあり，その右横には花瓶がある。各香炉には「金花」がひとつないしふたつささっている。この台の上に幕があり，それには「漁業順利出入平安」，「答謝神恩」，「善男善女答謝」と書かれてある。

「童子爺」廟は新開地Iと新開地IIにはさまれた場所にある。建物は左右の側室と中央の大きな部屋からなる。建物に対するようにして線香たての台（「天恩公」，「合港平安」と右から左に大きく書かれている）と，建物に向かって右手にレンガづくりの炉（紙銭を燃やすためのもの）がある。正面には入口の上に「會龍宮」と書かれた額があり，「双聯」には右手に「金□不断千年人」（□は判読不能な文字，以下同じ），左手に「玉盞常萬歳燈」と書かれてある。また，右側の側室には入口の上に「威靈萬載」の額，右手の「双聯」に「□□□□地靈人傑」，左手に「神功浩蕩物□民康」と書かれている。左側の側室には額が「顕耀千古」，右手の「双聯」に「震古□今臨下□赫赫」，左手に「推仁錫福恵我無彊」

とある。主室の奥には一番上に「八仙」の像が描かれ，その下に黒地に金文字で四つの板が次のように掲げられている。「錫港民以福□永獲盈豊」，「神通廣大救萬民」，「威靈顕赫□□□□」，「通四海之財源普□吉慶」。中央には「八仙」の幕がはられ，その下の台にはさまざまな神像がおかれているが，ほこりまみれで，壊れたまま放置されているものもある。この前には香炉のおかれている台があり，七つの香炉がある。中央のテーブルには剣が五つたてられ，「七星燈」がふたつ，燈明，ろうそくたて，線香たてなどがある。さらに小さなテーブルがふたつあり，ろうそくたてや *poe* がおかれ，一番前のテーブルには「八仙と獅子」の幕がはられている。中央右横には床に小さな香炉がおかれ，その前にはろうそくたてが左右にふたつたてられている。

「将軍爺」廟は「港口」左岸の東端にあり，三つの村の廟の中で最もみすぼらしい。道路から小屋までは細い板が杭の上にわたしてある。小屋の前にカマドがおかれ，その奥に向かって右から左に三つの旗が「三将軍勅令」，「大将軍勅令」，「二将軍勅令」という言葉が書かれて並べられている。建物奥の正面には「参将軍座鎮」(ただし将軍の文字は特殊な合わせ文字）という布がはられ，向かって右手に「漢高祖恩賜将軍」，左手に「秦□公勅封五道」と書かれた板がある。その下には白地に「合境平安」と書かれた台があり，簡単な線香の入れ物がおかれる。大きなテーブルにはろうそくたてや *poe* がある。

「法師公」は他の廟とは異なり，普通の民家を廟に改造したものであり，客間にあたる部分に祭壇をしつらえ，そこにさまざまな神像をおき，前庭に紙銭を燃やすための炉と3階だての塔をつくっている。

参考文献

岩切成郎．1977．「西マレーシアの漁業生産と漁業経済」『東南アジアの漁業開発』平沢　豊(編)，pp. 287-312．アジア経済研究所．

川崎有三．1978．「東南アジアにおける中国人コミュニティの比較研究」(修士論文)

________．1983．「見物人の方が熱狂する中国式縁台象棋」『季刊民族学』25：65．

________．1984．「マレーシア潮州人漁村の有力者たち」『民族学研究』49（1）：1-26．

________．1985a．「死者との別れ——マレーシア潮州人漁村に見られる葬送儀礼の事例から」『東洋文化研究所紀要』97：81-114．

________．1985b．「世帯サイクルのシステム論的分析——マレーシア潮州人漁村の事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』30：205-225．

________．1985c．「マレーシア型多民族社会システム安定化のための三つの仮設」『文化人類学』2：188-199．

Nyce, Ray. 1973. *Chinese New Villages in Malaya.* Singapore: Malaysian Sociological Research Institute.